
米炊き、茂助。

海老

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

米炊き、茂助。

【Nコード】

N0472B

【作者名】

海老

【あらすじ】

戦国時代も終わり。これから、どうしてよいかわからない浪人の孫一という大男。なぜか、孫一は「戦国の世」では、騙され、裏切られ続けた。そんな彼は、武士は向いていないと感じていた。だが、それは彼の大柄な姿からは想像もつかない、優しい心の持ち主である事が原因だという事には気付いてはいなかった。自分が、侍でいる事に意味があるのか考えながら、各地を渡り歩いていた…。

壱の巻『戦国の終わり。』（前書き）

どうもどうも！！私、生まれて初めて小説というものを書いてみました。

読みにくい点もあると思いますが、最後まで読んで頂けたら幸いです。

なお、今後の自分の励みとなりますので、感想や評価を是非とも、お願い致します。

今回の小説は歴史小説としておりますが、設定した時代が昔というだけです。

登場人物などは、すべて創作なので歴史小説は嫌いだという方も一度読んでみて頂けると嬉しいです。

巻の巻『戦国の終わり。』

約百五十年続いた戦国時代。

侍や若者は『立身出世』『一国一城の主』を夢見て、戦に赴いた。

一体、どれだけの人間が、夢を散らしていったのだろう。

戦国の最後の大戦と言われた大阪の役から既に十年。

群雄が各地に割拠していた頃など今となつては、古い話である。

時代の変わり目という時には、時代の変化に対応して生きていくものもあれば、時代に取り残されたままの人間もいるものである。

現に、各地に浪人達は仕官先を求め溢れていた。

しかし、戦のなくなつた今、彼らを受け入れる大名家など、すぐには見つかるものではない。

浪人達は、武者修業と称し諸国を放浪しながら、武士として生きる為のすべを求めている。

一方で、民衆達は戦が無くなつた平穏な世界の到来にどこか、安堵していたが流浪する得体の知れない浪人達を警戒していた。

それは、戦国の時代、武士の意地や面目の戦といつても、民衆にも戦火が及んだ記憶が根付いているのだろう。

そんな民衆が、戦国時代一番の犠牲者だったのかもしれない。

ここは江戸へと続く、とある街道の小さな宿場町。

今年は七月の半ばだというのに、まだ梅雨の雨が降っている。

日もすっかりと落ち、街には人は疎らである。

軒を連ねる店の明かりが、街道を明るく照らしていた。

その中の居酒屋で、浪人と思われる大男が、徳利を転がしながらすっかり酔っている。

髪を無理矢理に束ねたような乱れた頭に、所々ほつれた着物、伸びた口髭は左右に錨のように上に向いている。

周りの客は、関わりにならないようにしながらも、時々見ては、顔を背けていた。

この大男も戦国の世の中に、取り残された一人である。

式の巻『浪人、三條孫一』

この長雨、雨やどりのつもりで入った様子だったが、夜が深まり、すっかり店には彼だけ取り残されていた。

この大男、名を『三條孫一』この男が仕えた家は、ことごとく敗れ滅びたため、彼を知るものは、

『負け三條』と彼の不運を笑った。

そうした中、戦国の世も終わりを迎えた。

これから先が定まらない孫一は、

『この道を行けば江戸にまで行けるんだぞ』

と誰かが言っていた事を思い出し、当てもないが旅を始めたのだった。

外は、今だ雨が降り続いている。屋根をつたった雨がボタツボタツと一定の音を奏でていた。

そのうち孫一が『こんなもの！』と、刀を放り投げていた。

しかし、孫一はスツと立ち上がり、刀を拾い上げると、また大事そうに胸に抱える事を幾度か繰り返していた。

見兼ねた店主が、迷惑そうな顔で『旦那あ、飲み過ぎだなあ。なんかあったのかい？だいたい、こんな飲んで金はあるのかい？』

すると大男は、すっかり座った目で『無礼者！俺は大阪の役では、大野修理様の隊で、右手では右の敵を薙ぎ倒し！左手では左の敵をと、縦横無尽の働きをした。三條孫一なりい！！』

『そりゃあ、すげえなあ。』店主が興味無さそうに言う。

『なんだい！！どうせ親父には、俺の良さなどわからん！！』と言うとバタリと倒れ眠ってしまった。

店主は、呆れ顔になりながらも、この男をどこか不憫に感じ。その

まま寝かしてやることにした。

翌朝、夏も近いせいか、眩しい光に孫一は起こされた。

外は、今までの雨が嘘のように止んで、木々についた雨露のせいか、葉や草がいつも以上に青々と輝いて見えた。

眩しい光を避けるように、体をよじっていると、『はっ』と気付き、自分の状況を理解しようと周りを見回していた。

すると、店主が『起きたかい？どうだい調子は？ひどい、いびき出しやがって。寝不足だよ。』と目を擦りながらやって来た。

孫一は、昨日の態度とは、うって変わって、大きな体を小さく、背中を丸め床に土下座した。

『すまん！金が無いのだ。しかし、誤解しないでくれ、始めから食い逃げしようとしたんじゃないのだ。』

一杯だけのつもりだったのだ、しかしながら、つい…』と、どうしようか困った様子だ。『とりあえず、これだけだが…。』恥ずかしそうに、緑青の付いた銭を床に出した。

店主は『そんなことだと思ったよ！』と怒りながらも、諦めていた様子だった。『そうだ！』ひれ伏していた孫一が顔を上げた。

参の巻『信じれる者』

孫一は、何か思い付いたのか、『昼まで待つてくれ、必ず金を作り持つてくる。』と言うではないか。

店主は、何か悪事を働くのではと『早まっちゃいけないよ、御代は諦めていたからさ。』と態度を柔らかくして説き伏せようとしたが、孫一は『これでも武士だ、ワシは大阪の役では…』

店主『それは、さんざん昨日聞きましたよ。まったく。』

孫一は、少し恥ずかしそうに頬を染めた。『とにかく！昼までには届けるから。』と孫一は、しつこく言い続けていたので、

店主は『わかった。わかった。ただ、変な事するじゃないぞ！』やれやれと、店主は折れた。

『信じてくれるんだな！』孫一が言う。

『ああ、信じてやるよ。早く行かないと、昼になっちまうぞ！』

『それもそうだ！急がねばな！』

と、なぜか嬉しそうに孫一は店を飛び出していった。

『変な侍だ。』と店主は、これまでよく見てきた、横柄な姿や気位の高い態度の浪人とは、まるで違った孫一を見て

『あんな侍もいるんだなあ』と呟いた。

日頃、浪人達の態度を見ていた店主は、浪人達を毛嫌いしていた。しかし、孫一のその風貌からは考えられない腰の低さや素直さに、自然と笑みがこぼれた。

どういうわけか店主は、この孫一という男を信じなくなった。

だが昼が過ぎても、孫一はやって来なかった。

店主は『仕方がない、信じた私が馬鹿だったか…。』店主は、夜の

店の準備に追われていた。

とうとう夜になった。店に明かりが灯り、賑やかな客の声が、店の周りまで明るくしていた。

店主が、昨日からの出来事をの話を常連の客にしていた。

すると、『そんな男、構わないほうがよかったんだ。すぐに、代官所に届けりやよかったんだ！』と言われてしまった。

店主は苦笑いを浮かべるしかなかった。

『まったくだよ！うちの人は、人が良すぎてねえ。あたしが居ないと駄目だねえ』昨日は居なかった、店主の妻が不機嫌そうに、店の片付けをしながら、言っている。

『わかった！奥さんそこに惚れたんだ！ガハハ。』客が楽しそうに言う。妻は『何言ってるんだい！』と少し照れながら、忙しそうに手を動かしていた。

しばらくして、ドタドタつと外から大きな足音が近づいてきた。

『ガラガラ、ボタン！』引き戸を勢い良く開けた音に、客達が会話が止まり戸の方を、何事かとばかりに一斉に見た。

『はあはあ、はあ。ふう〜』息を切らしながら、孫一がやって来た。髪を振り乱して、汗を体中にかいた姿に皆、息を呑んだ。

孫一は、店主の前に歩み寄ると

『おっ…遅れてすまなかった…。この街には…質屋が無くてよ…。隣の街まで行つてたら、遅れちまった！』息が切れ、言葉を詰まらせながら言った。

孫一は、懷から巾着を取り出し『親父！これで足りるか？』と、巾着ごと渡した。

店主は、巾着を開き覗き込むと

『ああ。これなら足りるな！』

店主は孫一が戻った事で、得意げな顔をしていた。

しかし、孫一がどうやって金を作ったか疑問があった。

『あんた、さつき質屋って言っていたが、何を売ったんだい？そんな売れるものなんかあったのか？』

孫一は、

『もう戦はなさそうだしなあ、これだよ』と綺麗に漆の細工が施された鞘を握っていた。

店主『まさか、刀をかい？』

孫一『まあ、しょうがない竹みつ（中身が竹で出来た刀）でも何とかなるだろう。じゃあ、ご馳走さん！』と言うと、足早に帰っていた。

『なんだいありや、化け物みたいな男だなあ』客が騒っていた。

店主は、孫一から渡された銭の入った巾着を開けて『かわいそうになあ』と呟いた。

客『何がだい？』

店主『いやなあ、いくら安物の刀売ったって、もう少し、金にはなるもんだ。あの侍は見かけによらず、素直でやさしいから、騙されちまったんだなあ…。』

常連の親父は『戦国の世で、すさんだ人間は多いからなあ、正直者は損するだけだよなあ』と真面目な顔をしている。

店主『戦国の世には、あの侍も、さぞかし苦労したろうに…。』

『…。』店に居合わせた者は、戦国が終わった今でも戦国の考えでしか、人を見る事が出来なくなっていた。

そんな自分を、孫一に気付かされたような気がした。久しぶりに静かな夜になっていた。

孫一は、特に行き先に当ては無かった。

夜だったが、不思議と足取りは早く、また軽かった。

それは、久しぶりに人に信じてもらえたからである。孫一は、今ま

で人を信じる事で信頼を得ようとしていた。

だが、そうした孫一は人に利用され、騙されることが多かった。昨日、店で金が払えなかったのも、道すがらに知り合った男に

『そなた、当藩に仕えぬか？』

その体なら、さぞかし戦では働いたのだろうな？

ただ、その為には金があるんだ。

悪いようにはせんから、どうだろうか？』と言われた。

なんでも、この辺りを治める戸田藩の者だという。

孫一は、その身なりを見ても、疑い用が無いと思い、金を渡したのだった。

しかし、待てど暮らせど、それから男は現われなかった。

痺れを切らした孫一は、城を尋ねたが『当家は、新たに仕官する者なぞ、探してはおらん！』と追い返されてしまった。

まんまと男に、渡した金を全額持ち逃げされていたからである。

このように孫一は、幾度も騙されてきた。

『負け三條』と呼ばれた訳も、戦況が悪い状況では、侍達の中では、逃げる者、寝返る者も多かった。

それがまた、戦国の生き方でもあった。

だが孫一は、どんな状態でも、義理堅く最後まで戦い続けていた。よって結局は負け戦である。

このような経験や不遇の中でも、孫一自身は変わることが無かった。正確に言くと、変えることが出来なかった。

孫一は、とある国の名門の武家の出であった。

三人兄弟の末の子で、出来の悪かった孫一は、幼い頃から兄達に比べられ疎まれていた。

八つの頃に養子に出されたが、その家でも、実家で疎まれていたせいか、孫一は伏し目がちであった。しばらくすると、

『協調性に欠ける男子だ。これでは将来が不安だ。』と言われ、家に戻される始末であった。

そんな時に孫一の祖母が、『孫一。人はのお、人の繋がり無しには生きては行けないのだ。どんな時でも、人を信じなさい。人を信じれる者は一番偉いのだよ。』

これなら、孫一も出来るじやろう？』
いじける孫一に、やさしく言い聞かせた。

唯一、この祖母が味方になってくれた。

孫一が、十五の時に祖母が亡くなった。

孫一は、この言葉を一生守り続けると祖母の墓前で泣きながら誓った。

祖母の言葉は孫一が、唯一信じる人の言葉だったからである。

だが、家での居場所を失った孫一は、この時に家を出たのだった。

夜、星の明かりを頼りに、どれだけ歩いたろう。

孫一は、ふと腰に目を落とした。『刀も無くなってしまったなあ、フツ、やることなすこと裏目だなあ。』

孫一は、どこか変な気分であった。あれほど武士というものに執着していた自分が、刀を失っても別段、落ち込むこともなく、むしろすこし、気楽な気持ちになったからだ。『さあて、どこか寝れるところはないかあ』とぼとぼと歩きながら、周りを物色していた。

すると、うつすらと、水田の横に小屋のようなものが見えた。近寄ってみると、ボロボロだが小屋があった。至る所が腐り欠けていたが、『一晩くらい。』と、中に入った。

真つ暗な中、孫一は中にあつた、わらの上に寝転んだ。

『明日から、本当に無一文だなあ。やっぱり釣りは貰っけばよか』

つたなあゝ』さっきの店で見栄を張った事を、少し後悔していた。
走り回って疲れたせいか、すぐに眠りに就いた。
外には蛙の声だけが絶えず響いていた。

四の巻『一期一会』

朝、体のかゆさに目を覚ました。首や手、足を、蚊に刺され、掻きすぎたのだろうか赤くなっていた。

『やれやれ、蚊に好かれても仕方がない…』ぶつぶつと言いながら、田に流れ込む水で顔を洗った、夏でも冷たい水の流れを、しみじみ眺めていた。

雲間から、差し込む日差しに背中を押されるように、また孫一は歩いていった。『今日は暑くなりそうだなあ。』

どれくらい歩いただろう。孫一は、汗を拭いながら歩き続けた。今年は例年になく長雨だったが、太陽が、やっと出番だとばかりの強い日差を出している。『なんだか、道が急になってきたなあ。これから山登りかあ』

今にも、へたり込みそうになってきたが、小さな茶屋を見た。金にはなかったが、思わず飛び込んだ。

『ふう。参った参った』股を広げ、裾をバサバサと扇ぎ、手拭いで顔を拭っていた。

『いらつしゃい、なんにしますかあ？』年は十五、六だろうか、娘の甲高い声に孫一は黙り込んでしまった。『すまんが…、金を持っていないのだ。水を頂けないか？』

『そうですか。わかりました』と少し不満そうに娘は、奥に戻っていった。『はい！おまちど！』

大きな握り飯と茶がそこにはあった。孫一は、目を丸くし娘を見て戸惑っていると

娘が『母ちゃんが困った時は、助け合いだつてさ！お金無い人のだすのかい？』って言ったら、怒られちゃった。』と言っていると、奥から娘の母だろう。『いつまで、しゃべってるんだい！これから忙しくなるんだよ』と娘を急かす声がした。その母が、孫一に微笑んだ顔を見つけると孫一は、ただ、『かたじけない。』と会釈し、大

きな握り飯にかぶりついた。

『ご馳走になつて、すまなかつた。何か手伝えないか？』と言うと、母は『ええよ、そんなことまた寄つて下さいな』と孫一を見送つた。孫一は仕方なく行こうとしたときに、店の脇に薪にするのであろう、丸太を見つけた。

『薪を作るのは、ワシにも出来るだろう』すぐに引き返してきた。

母は、少し驚いた様子であつたが『しょうがないね、それじゃあ、お願いしようかね』少し呆れたように微笑んだ。いつもは、娘がやつている仕事なのか、一番娘が嬉しそつだつた。孫一は、袖をまくり、襷掛けに縛り『フン！フン！』と無心で斧を振つた。

周りで鳴く蝉の声の中に、『パカツ』と薪を割る、こきみのいい音と共に、孫一は心地のよい汗を流してた。孫一の両脇には、小さな薪の山が出来ていた。

『わあ、まあ、こんなにすまないね。これで十分だよ』母親がやつてきた。

孫一『では、私はこれで…。』

母『ちよつと、待つててね』と何か思い出したように引き返した。

母と娘二人でやつて来て、『これをお持ちください』と竹の葉で包んだ、握り飯を孫一にくれた。

孫一は、涙を流しそうになつた。今まで人を信じて生きて行きたいと思つていたが、自分の見た目がいけないのか、疎まれ、何かあれば疑われ、人にやさしくされる。事に慣れてなかつたからだ。

母は『変な侍だねえ、泣いとるのかい？』娘も不思議そうにじつと、孫一を眺めていた。

孫一『いやいや、違ふんだ、泣いとりやせん！かたじけない、遠慮無く頂きます』精一杯に強がつた。

置いてあつた刀を差し、涙を悟られまいと『それでは』と歩きだした。

すると娘が『お侍様！髭が無い方がきつと男前だよ！』と言つた。それでじつと見といてたのかと孫一は気付き『ほつとけ！』と嬉

しそくに怒鳴った。

いつの間にか、西に傾いた太陽を睨み付け、またゆつくりと歩き始めた。

『髭かあ。』さつき言われたことを少し気にしする孫一だった。

しかしながら、暑い。

陽炎がゆらゆらと前にある人や物を揺らしている。

後ろから、威勢のよい声が聞こえてきた。

籠屋である。

徐々にその声が近づき、あつという間に孫一を追い越していった。

鉢巻きをして、籠を担ぐ男の隆起した体に汗がにじみ、動くたびに飛びかっていた。

『ご苦労さんだのう』思いながら、孫一は無言で見送り、今の自分を少し恥ずかしくなった。道の脇にすこし出来た木の影を一つ一つ追うように歩いた。

孫一は歩きながら、最近続く人の親切に不思議がっていた。いままで、歩いてきた中で、この辺りはやたら優しすぎる。

店の店主だって、普通なら俺は、無銭飲食で代官所につれていかれちまうし、さつきの茶屋だって、大概はすぐに追い返されちまう。こうした偶然にも続く幸運に孫一は『俺にも運が向いて来た』かと、上機嫌だった。

あんなに激しかった日の光が和らいできた、孫一は『やっぱりいい』と『先を急いだ』。

『んっ？』まわりは少し薄暗くなってきた。重く黒い雲が増えてきた。『雨が、参ったなあ』ボタツ…ボタツ…。つと粒の大きな、雫が乾いた地面に落ちると、小さな砂煙をあげ、地面を黒く塗りはじめた。

その刹那、激しい雨が降り出し、目の前の景色を白い滝のように変えた。

孫一は、どこか体を休めるところはないか駆け出した。

少し走ると、右側に階段が見えた。孫一は急いで駆け上がった、激

しい雨が階段を包むように伸びた木の葉に当たり、雨音は波のような音に変わった。階段を上がり終えると、小さな神社があった。そこには既に、雨宿りの先客がいた。

見たところ行商人のようだ、軒下から恨めしそくに空を見上げていた。

賽銭は無かったが、とりあえず手を合わせ、濡れてしまった着物を脱ぎ、壁にくくり付けていると。

『まったく、よく降りますなあ』関西なまりで、さっきの行商人が話し掛けてきた。

孫一の肩ほどもでの小男で、孫一を見上げるように話し掛けてきた。『ほんとだなあ』とやたら馴々しいこの男に、さすがの孫一も警戒していた。

今までも、こうした男に騙されてきたからだ。男は続けて『わ

てもなあ、少し前まで刀を差してましたんや。』『旦那も刀差しとると色んな意地張りますやる？』

孫一『…まあ、そうだなあ。』

男『せやから、意地も刀と一緒に捨てました。』

孫一『…。』

男『今は気楽なもんですわ。』

でもなあ、こうやって薬や針を売っていても、他の奴との戦やで！でも、こういう戦の方が、ええわ。

『男は、孫一を昔の自分に語り掛けるように、話していた。』

『あかんなあ、ちっとも止まへんわ。しゃあないこれからでも、商売や！じゃあ旦那も気張ってな！』

そう言くと、荷を雨から防ぐように念入りに包み、傘をかぶり飛び出していった。

雷の光に少し怯えながら、水溜まりをうまく飛び越え、あつという間に走り去っていった。

孫一は、その生き生きした姿に圧倒され、何も話せなかった。

そして、今の自分を改めて考えた。

うすうす気付いてはいたが、自分は武士というものには向いていない。

だが、自分には武士であるというものの以外何もない…

『どうしたら、いいんだ。』と、ただ意味もなく歩く旅に一気に嫌気がさしてきた。

そもそも、この旅も『この道をずっと行けば、江戸にまでだって行ける』と聞き、なんとなく始めた旅であった。

ときどき光り鳴る、雷に辺りが明るくなるが、今の孫一には、まったく気にならなかった。

今まで自分をただ、ぼんやりと振り返っていた。

孫一は半ば、やけ食いのように茶屋で持たされた、握り飯を胃に流し込み、夕立の涼しい空気に身を丸め、いつしか眠りに就いていた。

伍の巻『茂助の村』

朝、昨夜の雨のせいかうつすらと霧が立ちこめていた。

孫一は肌寒さに目を覚まし着物は霧の為かまだ湿り気を帯びていた、しかたなく、袴だけを着て、しばらく着物が乾くのを待った。

太陽が霧を照らし、なんとも幻想的な光景だった。

やわらかい光に、いま少し眠ることにした。

しばらくして、境内で近くの子供達だろう遊んでいた。

その遊び声で、目を覚ました。

すっかり霧は晴れ、いつものように夏の日差しが眩しく光っていた。子供たちが『茂助さん』『茂助さん』と聞いたこともない変わった童歌を歌って遊んでいた。

うまく聞き取れ無かったが、『茂助』という名前は聞こえた。

『変な歌だなあ』ぐらいに気にも止めず、まだ少し生乾きの着物を着て、重い腰をあげた。

道に戻り、少し歩くと小さな脇道があり。その別れ道のそばで、五六人が何やら話し込んでいる。大きな荷を背負った者や侍などが農夫をつかまえて話していた。

少し離れたところで裕福そうな娘が岩に腰掛け、付き人なのか、初老を迎えたような老人と困った顔をしていた。

『何かあったのか？』孫一が聞くと、一人が『どうしたもねえよ！この先の道が地滑りで塞がれちまったらしいんだ。話によればこの脇道を行けば、迂回して行けるらしいんだが、これがえらく遠回り。で他の道はないか聞いていたんだ。』

孫一『そうなのかあ、急ぐ用もない、仕方ないワシは脇道に行くかあ』

そう言うと、また新たな者が『やめときなよ、そっちにいても、しばらく何にもないぞ。』

そう言われたが、孫一は行くことにした。

今更、引き返したくはない、今まで何をしても中途半端な自分に反抗するように足を進めた。

脇道を歩いていくと、すぐに集落に入ってしまった。さつき遊んでいた子供たちも、ここから来たのであろう。遠くには川が流れ、一面に広がる水田には集落の民が、至る所に腰を曲げ草を取って汗を流していた。

集落の中程までくると、長雨のせいか痛んだ家を直している大工達が、作業を止めくつろいでいた。

すると、大工の一人が『さあて、さつさと仕事終わらずぞ、こんなんで飯食ったら茂助さんに怒られちまうぞ！』と一人が言くと、みなも賛同し、一斉に仕事をやり始めた。

『茂助？さつきの子供といい、いったい誰なんだ？』疑問に思いなから、歩き続けた。

『そろそろ、日も暮れてしまふなあ』孫一は、どこかにいい場所はないか、探していた。

集落も家が少なくなり、集落の終わりを感ぜさせた。集落に入った時、遠くに見えた川を、渡る橋にさしかかった。孫一は『そうだ！』と閃いたのか、橋桁から下を覗き込んだ。『ここでよいか』と橋の下で泊まることに決めた。

『ここなら、雨でも凌げるな。しかし、腹が減ったなあ』すっかり夕暮れ、村の家々からは炊事の煙が上がり、夕焼けの光が、その煙までを赤く染め始めた。

『魚でも採れんかのう』と川を覗き込むと、確かに小さな魚が泳いでいた。

孫一は、魚など採った事は無かったが、とりあえずやみくもに川をすくっていた。魚に遊ばれて『くそつたれめ！こんな事してたら、余計腹が減るだけだ。』仕方なく諦めて、寝ることにした時に、橋のそばに地蔵があつた。苔が付き大分、古ぼけたものであつた。孫一は、それよりも供えられていた、団子に目がいった。近づいて見ると、まだ新しい

孫一は、地蔵様の柔らかい表情に甘え『堪忍してください』と手を合わせ、手を伸ばし団子を驚づかみにした。

『コラッ！！茂助様の地蔵様に何しとる！』老いているが力強い声だった。杖を付いた老婆が、力強い目で孫一に睨みをきかせていた。孫一は、思わずポロツと団子を落としてしまった。

『せっかく茂助様にお供えしたものを…。』老婆は、丁寧に団子を拾い、やさしく砂をはじき、申し訳なさそうに地蔵に供え直し、拝み始めた。

孫一は、ただ『申し訳ない…。つい…。』と小さな声で言葉を濁らせ、謝る事しかできなかった。

拝んでいた老婆がふいに

『腹減ってるのか？』

孫一『えっ？』

老婆『着いてこい。』と、腰を曲げながら歩いていってしまった。

六の巻『生き続ける、菅沼茂助直隆』

仕方なく孫一も二、三步の距離を取りながら、老婆のゆっくりとした早さに合わせるように歩いた。

今度は老婆は、竹林に入っただけだった。

しかし、そこは竹林ではなく、家を囲う竹垣であった。

生い茂ってしまった竹垣や、家の萱ぶきの屋根にまで生える草を見て、その家の住人が、この老婆だけと考えるまでに、時間は掛からなかった。

時間が止まったような家の前で立ち止まっていると、老婆がまた鋭い目で孫一を見て『早く入らぬか』と言って家のなかに消えた。家の中は所々、すすけていたが、いろりの周りは綺麗に整えられていた。

孫一は『さつきはすまんかった、つい魔が差してしまってなあ』申し訳なさそうに言った。

老婆は『こんなかもしれないがの』というと、鍋をいろりに吊し、何かを温め直し始めた。味噌の香が部屋に漂ってきた。

孫一は『先程は…』と繰り返そうとすると、老婆は、鍋を掻き回しながら『もうええよ』と、俯きながら、ぶっきらぼうに老婆は言った。

孫一『ずっと、一人で住んでいるのか？』

老婆『息子等

は戦で死んだ嫁も病でな、もう七年になる。』

孫一が、かける言葉に困っている

老婆は『あんたは腰が低くて、やさしい目をしとる、茂助様のように』と今までと違い、客を迎えうれしそうな顔に変わっていた。

孫一『茂助様？そうだ！さつきも大工達が話していた。子供等は歌まで歌っていた。さぞかし立派な御方なのだろうなあ。』

どこに住んでおられるんだ？ワシも会ってみたい！』

孫一は、哀しい身の上の老婆を気遣い、出来るだけ明るく話した。

老婆『それは、武士としては偉くはなかったが、立派な御方だった。だかの、私が十八の時に亡くなられてしまった…』

もう五十年近くなってしまいが、ここの人間は誰も、忘れてはおらんよ。』

孫一は、『もつと、話してくれるか？』孫一は、なぜこんなに、無名な侍が五十年も経っても、語り継がれているのか、知りたくなつた。

老婆は、昔を懐かしむようにゆつくりと、語り始めた。

今から、何十年も前の頃、至る所で戦が起きた。

その戦火は民衆をも巻き込み、また、農具を武器に持ちかえ戦いに駆り出された。それゆえ、侍達だけの問題では無かった。

孫一が訪れているこの辺りも、今となつては、何もない閑かな所に見えるが、その昔、この辺りは海東家という大名の領地であつた。

ある年の秋の頃、戦があつた。その陣中『まったく、うちの殿様の戦好きにも困つたもんだな』『本当だなあ、俺の家はまだ、田の刈り入れが終わってねえんだよ。』二人の足軽が疲れ切つた顔で話している。

この時の領主である海東資長は、無類の戦好きで、

『戦いに勝利することが、国を大きくさせる。』などと言いつては民衆の気持ちも考えず、戦いに明け暮れる人物だった。

七の巻　『茂助と真柄左馬ノ介幸盛。』

『ぎやははは！』暗い空気の陣中に何人もの笑い声が聞こえてきた。一人の男を中心に、人だかりが出来ている。

『また、茂助かあ。』周りに居た者は呆れ顔でそう言った。

その男は尻に、焚き火の炭で尻に顔を書き滑稽に踊っている。

周りの人々は戦であるのも忘れ笑い転げていた。

すると、ガシヤガシヤと鎧を鳴らしながら小太りの男が走ってきた。茂助の組頭山崎式衛門である。『ええ加減にせえ、茂助！いい年をして何してるか！早く具足を付けろ！』

すごい剣幕で怒っている。茂助は驚いた顔をして、

『これはこれは山崎様、皆が暗い顔してたもんで。元氣出させよう。と、すいません。』照れくさそうに、着物を着はじめた。

その姿にまた、皆の笑いを誘っていた。

『皆も静まれ！明日には戦だぞ、しっかり休め！』そう言うと、山崎はぶつぶつと文句を言いながら帰っていった。『まいったなあ、またやってしまった。』と頭を掻いていた。

髪に白いものが混ざりはじめた『茂助』という四十過ぎの男、本名『菅沼茂助直隆』見かけによらず彼は、代々続く、武士の家系の男である。

彼は荷駄部隊という、戦の時に米や食料などを運ぶ部隊であった。

農民達には、その腰の低さや武士の身分を少しも鼻に掛けない姿から『茂助様、茂助様』と人気があった。

一方で同僚の武士などからは、『あれでも武士かと。』蔑まれ、陰口を言うものも少なくなかった。

また、茂助が戦場で作る料理が『うまい』と評判であることから、同僚の間では『米炊き茂助』と呼ばれていた。

今回の戦は隣接する。岡上家との戦だった。先代の頃からの因縁があった一族だ。最近では、この犬猿の仲の両家は秋頃になると毎年、

小競り合いが起きていた。

今年は、いっぴくなく規模の大きな戦になり。

日にちも流れるように速く過ぎていた。泥沼化した戦に、『まだまだこれからよ。』

『と指揮する武将達は意気が揚がっていたが、戦う兵士達は両家とも疲れ切っていた。』

数日後『明日、国に帰る。』と組頭の山崎から、言いわたされた。

その夜皆、一応に安堵した顔を浮かべ、茂助作った雑炊を食べていた。『やっぱり茂助様の雑炊は一番だのゝ戦が終わると、これが食べれなくなる。さみしいのゝ』権左という、茂助と同じ村から来ている若者が、碗を持ち名残惜しそうに言った。

『何を言ってる。戦となると震えとるくせに。』茂助に言われ、皆に『ハハハ、違えねゝ』と笑われ権左は『そんなことはない！』と、ふてくされて違う方向に体を向けて、雑炊をかき込んでいた。

ススキや草が風に、たなびいて擦れる音が静かに流れていた。

『うわっ！』権左が碗を落とし、一点を指差したまま身を震わせていた。

指の先には、一人の男が血塗れになりながら、立っていた。皆、慌てて刀や槍を手に取りつた。皆、逃げ腰になりながらも、一塊になり刀や槍を向けたが、不意の事態に動揺していた。

その男の兜や鎧が所々、損傷し、その姿からは、この戦で激しく働いた証に見えた。

なおかつ、その男の勇猛さが体から滲み出していた。

一同が怯えるように男を警戒していた。

すると、男が口を開いた『海東家の御家中か？』

茂助が『そうだが…。そこ元は？』と声を震わせながら言い返した。

男は『ワシも海東の者だ。真柄と申す。』

真柄は、大きく息を吐くと、その場で座り込んだ。

『あれが噂の真柄かあ、恐ろしいのう。』皆が話すように、最近、

真柄というやたらに強い男が流れてきて仕官したらしい。

噂によると、すごい癪癩持ちで、前の仕官先では些細なことで人を斬って出奔したとか。噂は噂を呼び、彼は何とも浮いた存在だった。

茂助は、ためらわず真柄に近づいていった。

権左は『茂助様、やめといたほうがいい。』と引き止めたが、茂助はどんどん進んで真柄の前に腰を下ろした。

『ご苦労さんだったの。傷は大丈夫か？』

真柄は『返り血だ…。』と鬱陶しそうに、これが

「米炊き」

と言われる茂助かとしみじみと見ながら言葉を返した。

真柄は、この国での戦の手緩さに頭に来ていた。毎回、意思表示のような小競り合いの戦を繰り返し、この戦も今一押しというところで撤退だ。自分が命を懸け戦うのが、無意味に感じていたからだ。

すると、茂助が真柄の目の前に、雑炊の入った椀が出された。『まあ、命があつて何よりだ。今日の雑炊は特別だぞ。その山に、茸がたくさん生えていてな、うまいぞ。』

真柄に手渡そうとしたときに、真柄は『いらぬ！』と椀を茂助の手から、叩き落とした。

茂助の顔が一変した。『バシッ！』茂助は真柄を殴り付けた。遠巻きに見ていた、権左達も今まで見た事ない茂助を黙って見守ることにできなかつた。

『この米はなあ、百姓達がどんな思いで作ったかわかつとるのか！百姓達は我ら侍の為に、こうして戦にも出て、米まで与えてくれているのだ！』と怒鳴っていた。

真柄は、あの噂に聞く茂助との違いに啞然とし、何も出来なかつた。茂助は椀を拾い上げ、今一度、雑炊を真柄のもとに差出し、『おかわりは出来ぬぞ』と最初の優しい顔に戻っていた。そして、『兜を素手で殴っちゃ痛えよなあ！』っと、心配そうに見守る場所に帰っていた。

真柄は、何故かはわからないが無性に、身勝手な自分が恥ずかしく

なり、情けなくなつた。

ただ、体に入る雑炊の温もりが、人の暖かさのように包み、少し優しくなれた気がした。

しかし、近くで談笑し、笑いの耐えない茂助達が、すごく遠くの存在に感じていた。

真柄が腕を返しに立ち上がり、茂助のもとにゆっくりと歩み寄つた。どうやって声を掛けていいかわからない真柄に、茂助の横に座つていた権左が気付き、茂助の肩を叩いた。『どうだい？うまかつたろう。』茂助が明るく問い掛けると、真柄は『さっきはすまなかつた……。うまかつた。それでは……。』

腕を渡し離れようとする、真柄に茂助は『こつちに来て、火にでも当たりな。今夜は冷えるぞ。』と茂助は立ち上がり、真柄の腕をとり輪のなかに引き込んだ。さっきの空気とは違って、すっかり、何を話していいかわからない雰囲気になつてしまつた。

『しょうがないなあ』と茂助は懷から、手ぬぐいを出し顔に巻き踊りはじめた。『待つてました！』と権左が合いの手を入れ始めた。くすくすと小さな笑い声が起こりはじめ、徐々に大きな笑い声に変わつていった。

そして、今日はその笑い声の中に、一際大きな声が交じつていた。

八の巻『親父様』

それから数年、何度も戦は起きた。

しかし、大きな戦は無く比較的穏やかな日々が続いていた。

『組頭様！！精が出ますな！』畑を耕す茂助を見つけ権左が声をかけた。

『その言い方は止めると言ってるだろ権左！』

茂助は、荷駄部隊の組頭になっていた。

出世と言えば聞こえはいいが、元組頭である山崎が病になり、荷駄部隊の主な者は農民であつたため、その人望の厚い茂助が抜擢されたのである。まさに五十を過ぎてからの出世である。

『父上！！』真柄の声である。『お前もその呼び方は止める！』

真柄は茂助との出来事から、人が変わったような朗らかな男になり、また、戦の時は先駆けとして、戦功を挙げ続け今では、侍大将にまで出世した。まわりの国の者からは『鬼真柄』と恐れられていた。

そんな真柄はいつしか、茂助の事を、父のように慕っていた。天涯孤独という彼は、時にふざけて茂助のことを『父上』『親父』と呼んでいた。

茂助には妻に先立たれ、子供にも恵まれなかったため『父上』とは、初めて言われ言葉だ。恥ずかしかったが、決して悪い気分ではなかった。

『今日はどうした？おふう殿も一緒か。』

おふう。とは、昨年、祝言を挙げた真柄の奥方である。田尻という組頭の次女で、おとなしく慎ましい女であつた。

『実は、ふうに子が出来ましてなあ。親父殿と飲もうと思ひまして。』二人とも少し頬を赤く染め、照れていた。

『そりゃ、あめでたい！』茂助は自分の事ように喜んだ。『しかしなあ、うちには、何もないぞ。』

真柄『大丈夫！私が買ってまいりました。』真柄は、酒や魚を取出

し『今日は、親父殿の料理が食べたくて、これで足りませんか？』と続けた。

『ハハハ！こりや参ったなあ、よし任せておけ！』茂助は腕を捲り、さつそく調理を始めた。『何かお手伝いを…』おふうが、そつと寄り話し掛けると。

『よい。よい。座っていてください！今日はお客さまゆえ。』そうやって両手を振り、腰を低く言う茂助におふうは、思わず笑った。それを見ていた真柄は『相変わらずだの』親父様は飯の事になると誰にも触らせないのだから。』

しばらくして、いい香が漂い始めた。『今日は何を作っているんだ？』真柄は我慢出来ず、作る茂助を眺めるように言った。『いま少しだ、待つとれ！』茂助は左右に慌ただしく動いている。

『ほれ！出来たぞ！自慢の茂助鍋じゃ！今日は寒いでな』さらに、魚の煮付けや漬物を『こんな料理しか出来んがの。』と茂助が照れ臭そうに料理を並べていった。すっかり辺りも暗くなり宴が始まった。

『うまい！』真柄が、膝を叩き『おふうでは、こうはいかな』と言つと、おふうが真柄の足をつねり『私だって出来ます！』と顔を膨らませた。

顔を痛みで歪めた真柄が『わかつておるよ、冗談じゃ、冗談！なあ、許せ。』と謝っている。『ガハハハ！すっかり、尻に引かれてるな。鬼の真柄も、勝てぬものがあつたか！ハハハ。ワシの昔の頃と同じじゃ！』茂助が、微笑まそうに笑っていた。

『なんじゃ、皆でいじめるな。』真柄はやけになったように、酒を一気に飲み干した。

『楽しそうじゃの？』匂いに釣られたのか、羨ましそうに権左が家に入ってきた。『あつ！真柄様！奥方様も！今日はどうしたんじや』

『ワシにも子が出来てな、茂助様に祝ってもらっていたのだ』真柄が言つと

『本当か！俺も誘ってくれよ！水臭いなあ……。そうだ！ちよつと待ってくれ！』すぐに権左は、どこかに向かつて茂助の家を出ていった。

何をするつもりなんだ？と考えると、家の外から太鼓や笛の音が聞こえてきた。

権左が仲間を連れ戻ってきた。『俺たちや、金がないからさ、金掛かるものは出来ないけど……。代わりに、これを俺達の気持ちだと思つて聞いてくだされ。』

権左が言つと、一斉に太鼓や笛の音が流れ出し、部屋一杯に溢れだした。そして身分などの壁を越え、人との触れ合いの中から生まれる暖かさがつつんでいた。

『親父様すまんが、そろそろ私達は帰らなければ。』真柄は席を立った。『何だ、まだよいではないか？』少し微酔いになりながら、茂助は呼び止めた。

『実は、北の国境の砦を預かることになりまして、あす発たねばならんです。親父殿とは、会いずらくなりますなあ……。』哀しげな表情の真柄に『何を言つとる！いつだって会える。それにしても、大出世ではないか！子も生まれるし幸せ者が！』寂しそうな真柄の表情を見て、笑顔で茂助は勇気付けて『がんばれ！』と尻を叩いた。茂助達は、皆で真柄を見送った。丁寧に頭を下げ、去っていく二人の姿は、あつという間に暗闇に消えていった。手にもった提灯の明かりが、ぼんやりと光っている。今日に限つて、月も星も出てはおらず、辺りは何も見えなかったが、茂助は提灯の明かりが、小さく見えなくなるまで目で追い続けた。

『親が子供を送り出す時は、こういう気持ちなのかなあ』

初めて感じた感覚だった。茂助の見つめる暗闇が、滲んで見えてきた。

『茂助様、何してるんだい？まだ酒もあるぜ！飲み直そうや』権左が酔っ払つて声をかけた。

『よし！飲もう！』茂助は赤くなった目を、権左達に悟られまいと

必死に明るく振る舞った。

茂助は夜風がいつもより冷たく感じた。茂助は、酒を飲むとすぐに寝てしまうほど、弱かった。だがこの夜だけは、なぜか酔うことが出来なかった。

九の巻『變動の始まり』

この年の、冬に事件が起きた。その日は今年一番の寒さ、ともいえる朝であった。

城の中は、慌ただしく動いていた。国一番の医者が呼ばれ、皆、悲壮な顔をして祈ることしか出来なかった。至る所で涙をすすり、嗚咽のような声が漏れていた。

倒れたのは、茂助達の主君、海東資長その人だ。

朝、廁に行つた時に廁の中で『ドタツ！』と音がしたため、近従が見ると倒れこんでいたという。医者が手首を握り、目を閉じ慎重に脈を探っている。周りを囲むように皆が、その一挙手一投足に息を殺し、食い入るように見ていた。

やがて医者が目を開き、資長の目を確認していた。そして、先程まで握っていた手をゆつくりと布団の中に戻すと『残念ながら…』と首を横に振った。

一瞬の沈黙のあと、膝を落とし、激しく号泣する者。この現実を信じれず。啞然としたまま動けぬ者、城の中は騒がしく一様に悲觀に暮れた。夕刻、この国のすべての禄を持つ侍に登城が命ぜられた。茂助にも、『急ぎ登城せよとの、ご命令です』と使者がやってきた。雪がちらつく中、茂助は笠を被り、蓑に身を包み急ぎ城に向かつていた。

『くうゝ寒いのゝ。』

この歳に、この寒さは厳しいのゝまったく、何があつたんじゃ！』などと、ぶつくさ言いながもやっと城に着いた。中間の者が『お早く、大広間へ！』というのと、去っていった。みな、落ち着かない様子だ。『何事だあ？』といったものように、のんびりと茂助は、大広間に向かった。

大広間には、すでに多くの侍が、こつた返していた。外の寒さを忘れるくらいの熱気が充満していた。

侍達は『殿が亡くなれたらし』、『これから当家はどうなるんじや』、『近従の二人が殉死したらしいぞ』、などと、さまざま声が飛び交い騒がしく話し合っている。

『はっ？殿が亡くなれた？』茂助は、初めて聞く話に困惑した。辺りを見回すと、遠くに真柄の姿を見つけ。駆け寄っていった。

『おいおい！幸盛』と肩を叩いた。

『おおっ親父殿。』真柄は珍しく強張った表情をしていた。

『殿が亡くなられたとは本当か？』茂助が聞くと

『どうやら本当らしいですぞ。』と言うと、唇を噛み締めていた。

特に、何も話すことはなくとにかく待ち続けた。

『静まれ！皆静まらぬか！』と言いながら、広間の奥から家老であり殿の嫡男、珠々丸様の守役の水野忠左衛門が出てきた。

その後ろから、殿の奥方の凧の方が珠々丸の手を引いて現われた。皆、頭を下げ騒がしかった、大広間が一瞬にして静まりかえった。

凧の方は、珠々丸を従えたまま、皆に語り始めた。

『殿は今朝、倒れられそのまま亡くなれた。卒中であつたそうだが戦に明け暮れ、病魔に気付かなかつたのやも知れぬ。』

所々で啜り泣く声が聞こえて来る。茂助の前に座る真柄の肩が震えていた。真柄は、亡き殿に拾われ侍大将にまで取り立ててくれた大恩ある方だからだ。

凧の方は、気丈にも表情を変える事は無かつた。

『今日からは、この珠々丸が当主である。』

皆、変わらぬ奉公を願う。』

『はっ！！』皆の声が同調し、静かだつた城内に響いた。

しかし、珠々丸は歳は未だ十歳、集つた侍達の不安の色は消えなかった。

次に風の方に代わって、水野が話を始めた。『殿が亡くなつてすぐに殿の近従の佃、山岸の両名が殉死をした。両名の忠誠心は、武士として手本とすべき事なれど、先程の奥方様の言葉どおり珠々様の為に働いてもらいたい。殿も必ずそう言われるはずだ。よってこれからの殉死を禁じることを、奥方様や我ら家老から、皆々に申し付ける。』

また、この事実が他家に伝わることは時間の問題であらう。幸い、今は冬街道は雪で塞がれる為に、春の雪解けまでは安泰であらう。しかし、北の岡上をはじめ、東には柿崎、南の大国の木之下までが、いつ牙を向き襲い掛かかって来るやもしれん。海東家の団結に一片のほころびを作らぬ様に、力を一にし団結してもらいたい。某からは以上である。』

皆、ため息をつき不安ばかりが頭をよぎった。

大きな戦の予感が、鈍感な茂助にも感じる事ができた。葬儀は、すこしでも他家に知られることが遅れるよう、出来るだけ少数の人間で密葬として静かに執り行われた。寒空のなか、大きな位牌を持つ珠々丸の姿が参列した者の涙を誘っていた。

拾の巻『流れにもがく』

こうした、主君の死を知られない為の策はあまり効果は無く、海東家を狙う他家の間者などにより、雪解けを待たず隣国の知ることになった。

各地から調略の手が延び、領内でも、謀反が相次いだ。

茂助は、仲間同士の戦の中でも『ご苦労やったの。ご苦労やったの。』と変わらぬ笑顔を振りまき、飯をつきり椀を配りながら、元気づけていた。

しかし、すっかり領内は荒れ、謀反が相次いだ結果、侍達は互いを猜疑心で見えるようになってしまい、信頼も希薄になりつつあった。そうした彼らの唯一の希望は、『鬼真柄』の存在だった。

隣国にも知られた彼は、どの大名家からの調略も受けたが、なびかずに先駆けの精鋭を率い戦い続けていた。

そんな真柄の姿が壊れかけた、武士達の心を繋ぎ止めていた。だが、とうとう春を迎えた。

『申し上げます！』北を守る真柄の中島砦から早馬がきた。『岡上勢、約2000領内に向けて進軍中！』

次は、西を守る三鷹砦から『西からは、柿崎勢、約3000国境に迫っております。』

さらには、南の木之内家に潜ましていた、忍びの黒雲が戻り『木之下家に、近々出陣の兆しあり。まだ数は、わかりませぬが、大軍に違いますまい！』

夕刻。城内において、すぐに軍議となった。

家老の水野は、腹を括ったのか、すっきりとした顔をしていた。

『軍議の前に申しておきたいことがある。黒雲ら我らの忍びが得た話によると、どうやら、敵は密約を交わし同時に攻め込んできたら

しい。

そして、奴らは、我らの領地を分け合う腹だろつ。

皆、殿が亡くなってから、よくこれまで戦い抜いた。この水野、礼を言う。今、命を無駄に散らすこともない。

去りたいものは、去つて構わない。咎めはせぬ。正直に申せ？』

『これで、よろしいですな風さま？』水野は居合わせている風の方に問い掛けた。風の方は俯き『致し方ありません。これも定めですよ。』

返事を受けた水野が、皆を見渡した。しかし、誰も言葉も出さず、水野を見つめていた。

真柄が口を開いた。

『水野様！ここに來た者は、海東の家に命を捧げたものに御座ります。』

この大戦に出会えたことも幸せ。

精一杯戦い、後は城を枕に討ち死にすればそれでよい！！』

『おおおお！！！！』男たちが一斉に声を挙げた！

『礼を言う…。』水野は声を詰まらせながら頭を下げた。

『それでは、この真柄、我が中島の皆にて、出来るだけ岡上を叩きます。必ず生きて戻ります！では、御免！』勢い良く飛び出していった。

真柄は城を出るときに、せつせと城に米や味噌を運び入れる茂助を見つけた。

『あと一息だぞ！もう少しで戦の時、腹一杯食えるぞ！』声を張り上げている茂助に、声を掛けた。『元気だの親父殿は。』

『皆に戻るか？』心配そうに茂助が問いかけると、

『大丈夫じゃ、叩くだけ叩いてすぐ戻る。おふうも、この城に入るしな。』

おふうと最後は一緒に、と約束もしてるのだ。必ず戻らねば、あの

世に行っても恨まれてしまう。』

『そうだ、これを持っていけ』懐から茂助は、握り飯の入った包みを取り出すと、三つの握り飯を一つの大きな握り飯に作り変えた。『そんなに、でかくしたら食べずらいではないか？』言い返すと。

『だからよいのだ。鬭いの間に食べるには、大き過ぎる。

少し食べたら残さにゃならん。だから、また食べる為に生きなきゃならない。

この、米炊きの茂助様の握り飯だ、必死に戦いたくなる味がするぞ！』

得意げに茂助は、腕組みして言い聞かせた。

『ハハハッ！親父殿には勝てぬなあ！わかった。大事に食って、長生きするわ！』

『では！』と馬にまたがり、砂埃をあげ勢い良く駆け出していった。

拾巻の巻『嵐の前の夜』

真柄を見送った間も、ぞくぞくと城には籠城と聞いた、武家の妻子達が集まっていた。

そうした中の子供達を見て茂助は自分の村の子供達を思い出していた。

茂助は、自分の子供がいない代わりに村の子を集めては字を教えたり、共に歌を歌い、寺子屋のような事をしていたからである。

戦の酷さを知ってるからこそ、子供たちや村の人たちの顔が頭をよぎっていた。

二日後、城の守りの備えが整いはじめた頃、真柄の砦から早馬がやって来た。

『真柄様の部隊！岡上の部隊と交戦！見事、敵の第一波を迎撃、見事これを敗走させましてございます！』

『さすが真柄様だ！』ワツッと城内が、沸きに沸いた！！しかし、所詮は多勢に無勢吉報は、なかなか届かなかった。

『海東十内様、討ち死！三鷹の砦陥落しました。』

矢が刺さり、ボロボロになった使者がつたえた。

海東十内とは、亡き殿の従兄弟に当たる人物であった。

夜になると、西の三鷹砦が明るく光り、燃えている様子がわかった。その明かりは、大きくなったり小さくなったりと、まるで生きているように蠢いていた。他にも、各地で敗戦の報が相次ぎ、真柄からの使者も全く来なくなった。

敵はほとんど、この城に迫って来た。

次の夜、

『茂助様！あれ？北の方向が明るく光っている。』

『真柄様までもか…。』皆が肩を落としていた。

『馬鹿たれ！幸盛が死ぬ訳が無いだろが！必ず戻るぞ！』

一番その事実を信じたくない茂助は、声を張り上げ。外から目を背

け、城の中に入り込んでしまった。その夜、やけに城の周りは静かだった。

ただ城の篝火だけが、パチパチと音を立っている。

この国の中で命のやりとりが繰り広げられているとは、考えられないほど静かだった。

だが、兵士達は、敵とともに着実に近づいて来ている、『死』というものを感じて、大半の兵が寝付けない夜を迎えていた。

茂助は、城の中にある米蔵が落ち着くらしくそこで、真柄を心配するうちに眠りに就いていた。

その時、『てつ敵襲！！』櫓から、物見が叫んだ。

兵士達は、皆飛び起きて櫓の上に向けて、

『どの方角からだ？』『数は？』櫓を見上げ、問い掛けている。櫓の上にいる、若い足軽は身を持ち出して目を凝らしている。

続けて、物見が言った。

『北の方角から、約十数騎こちらに向かってきます！』

鉄砲隊の組頭の男が、

『十数騎だと！他の隊は見えるか？』

物見は、

『他の隊は、見えません！その部隊だけです。どんどん近づいてきています。』と答える。

確かに人影が近づいて来るのが見える。だが夜襲にしては、数が少なすぎる。『味方か？』

『馬鹿野郎！そんなもん何処にいるんだよ！』

『夜襲ではなく、物見ではないのか？』兵達は、思い思いに思慮を巡らしながら、近づいてくる者を見失わないように見続けている。

その中には、鉄砲や弓を構えている者もいた。

『んっ？様子がおかしいぞ。』組頭が気が付いた。

その者達が、時折こちらに手を揚げ向かってくるではないか。今度は、皆が身を持ち出し目を凝らした。

すると、先頭に赤い具足を身につけ、握り飯を食べながら馬に乗っている者が真柄だと気付いた。

『真柄様じゃ、真柄様が帰ってきたぞ！』

『本当だ！真柄様だ！』

兵士達は、門に向かい走りだした。

真柄達が、ぞくぞくと城に入ってきた。

『怪我を負ってるものが多い、手当てをしてくれ。それと、』と言うと、真柄は櫓の方を振り返り『コラ！敵襲とはなんだ！落ち着いて報告しろよ！だが、しっかり見ている証拠だ。大義！』明るく言い放った。

櫓にいた足軽は、『失礼致しました！』と体を硬直させながら、頭を下げていた。

『真柄様とは知らず、まったく焦りましたぞ』さっきの組頭がホツとした表情でやってきた。

権左がやってきて、『わしなんて、危うく真柄様を射ちまう所でしたよ！』と言ってきた。

『お前の玉など当るか！お前は荷駄部隊だろうが！鉄砲など触るな！玉の無駄じゃ！』真柄は権左の頭を軽く叩いた。

『ハハハハハ！！！』

すっかり真柄は、兵達に囲まれてしまっていた。

そして、久しぶりに城の中が、明るくなった気がした。

真柄は、少し真面目な顔をする

『わしは、これから水野様の所に行かねば、ならないのだ。

明日は、戦になるぞ！皆ゆっくり体を休めておけ！』そう言い、兵達を解散させると、真柄は、城の中に入っていった。

城の女達も、鉢巻きに襷掛けをして、すっかり城の中も戦の装いである。

『水野様、夜分に申し訳ありません。真柄幸盛、ただ今戻りました。』

水野は兵達の声に目を覚ましていた。

『真柄か、よく戻った。いつも難儀な役を押しつけてしまってますんな。』

水野は、これまでの真柄に感謝するように礼を言った。

『なんの。いま少し耐えられると思ったのですが、二度ほど押し返すのが精一杯で…。皆に火を放ち逃げ帰っただけでございます。』

この城に辿り着くまでも、私の身代わりに沢山の者を死なせてしまいました。殿からお預かりした大事な兵も、今や、二十ほどに…。申し訳ありません。』

悔しそうに真柄は床に拳を叩きつけた。

『何を言う。お前が戻ったから、この城の者が戦う士気を戻したのだぞ。』

わしは、少々、生き方を間違えたかの？兵達と笑い合った事など、わしには無かったからなあ。寂しい人間だ。』

笑いながら、いままでの自分を振り返っているように話していた。

水野は続けて『真柄。明日は、この城で戦になるか？』

『恐らく。ただ、これが私の最後の御奉公！存分に働いて御覧に入れます！』

真柄は、力強く答えた。

『あい解った。！今宵は体をゆっくり休めてくれ、大義であった。』
『言い、陣に降り始めた。』

真柄は『それでは、これにて失礼致します。』
『言い、陣に降り始めた。』

水野のもとから、陣に帰る途中に真柄は、城の格子窓から自分の皆の方向をみた。死んでいった家臣達の顔が浮かんだ。『わしも、もう時期そっちに行くぞ。もはやこれまでだ。』

しかし、真柄に悔いはなかった。

自分はここで、茂助に出会い生まれ変わった。

笑いもしない、偏屈な男が今、皆の中心で笑顔に溢れている。さらに、侍大将まで出世まで出来た。そんな大切な国の為に死ぬことは、自分の本懐と考えていたからだ。 しかしながら、

生まれてくるはずの子を殺してしまう事だけが心残りだった。

『一度でいいから、自分の子というものを抱いてみたかったな。』

まだ見ぬ、我が子を想像していた。

『旦那様。よくご無事で。』

真柄が戻ったと聞いた、おふうが真柄を探し、やっと声を掛ける事が出来たのだった。

大きなお腹をしていたが、鉢巻きをして、襷を掛けている、おふうを見た真柄は

『おふう。何をしているのだ、その格好は城の仕事をしているのか？駄目ではないかじつとしていなければ！』

真柄は強い口調で問い詰めた。

おふうは真柄の口調に怖じける事無く

『子供というのは凄いいですね？』と、やさしく言い返した。

『何の事を言っているのだ？』

真柄は厳しい顔のまま、おふうを見た。

『私が、城の中で貴方様のことを心配していると、この子がお腹を蹴るのです。』

まるで、わたしに大丈夫だと勇気づけるように。

それで、なんだか、じつとしていられなくて……。きっと、この子は貴方のように強い子なんでしょうね。』

目に涙を溜めながら言う、おふうを真柄は抱き寄せた。

『すまん…。すまん…。』

すべて俺のせいだ。これも、武家の生き方、我らの定めと思って…。許してくれ…。』真柄も今まで我慢していたものが一気に流れた。

『あつ！また、お腹を蹴りましたよ。貴方が弱気な事を言うからですよ。』

今まででも、私は幸せでしたよ。

この子とは、あの世行ってから三人でゆっくり暮らせば良いではありませんか？』おふうは、泣き顔を精一杯の笑みに変えて真柄をなだめた。

『しかし、わしは死んだら地獄行きだぞ！参ったなあ。おふう達と離れてしまっぞ！』真柄も、負けじと笑顔で返した。

『それならば、閻魔さまに頼み込んで地獄行きにしてもらいましょう！』おふうが気丈に答えた。

『ガハハハ！やっぱり、おふうには勝てぬなあ！完敗だ！』いつもの笑顔で言っと。

『最後は、一緒に…。』おふうが、一呼吸おいてから言った。

真柄は、静かにうなずいた。言葉などは使わなくても、お互いが、その気持ちは手に取るように解っていた。

『そろそろ、戻らねば。お前も体を気をつけるのだぞ。』

二人は離れ、それぞれの場所へと帰っていった。

真柄に涙はもうなかった。

真柄の中には、何があってもおふうを、一人では死なせないという決意が生まれていた。

おふうは、涙を拭いながらただただ、もう一度逢える事を祈ること

しか出来なかった。

その夜。敵方は連携を保ちつつ、夜陰に紛れながら。海東勢の籠もる、この城を取り囲むように兵を進めていた。

拾貳の巻『開戦。』

この海東家の本城である、この城は『鳴海城』といい、海東家が三代にわたり作られた城である。

『鳴海城』は山に作られた山城である。

規模は、さほど大きな物ではない。

しかし、その山の尾根伝いに城郭が作られる『連郭式』の形を持つ城で、堅城と知られていた。

この城に、十歳の主君である海東珠々丸を始めとする、約2千の兵が籠城していた。

『ここに、海東あり』と謳われた時代もあった。

名族、海東も戦国の渦の中に巻き込まれ、まさに今消え掛かろうとしていた。

この城を囲むのは、海東から南の国一帯を従えた、新進気鋭の大国、木之下家が中心だった。

大国、木之下が動いたと聞いた、隣国の岡上や柿崎は、いち早く恭順を示し、兵を出していた。

木之下に敵視されたくないと同時に協力することによって、自国の領土安堵を願ったのである。 その軍勢の数は約1万2千。

他にも木之下は、後詰めとして七千の兵を待機させていた。

まさに万全の状態である。敵の大将、木之下秀家は、28の若者だがその行動に油断も、奢りもなかった。

だんだんと、東の空から明るくなりはじめた。

徐々に空は、雲一つなく晴れ渡り、これから戦になるとは思えないほどだ。

城の中でも運命の朝を迎えた。

『真柄はどこじゃ！幸盛は！』

昨日、すっかり寝たままだった茂助が、真柄が戻ったと聞き、朝早くから走り回っていた。

寝ていた権左を、見つけた茂助は肩を揺すり

『おい！権左！権左！幸盛を真柄を見なかったか？』

すると、権左が眠そうに、茂助を見て

『真柄様なら、昨日、一の丸で話しました。』 寝呆けながら

茂助に言った。

『分かった！一の丸だな！』茂助は、急いで一の丸に向かった。

そうして、一の丸で具足を締め直している真柄を見つけ声を掛けた。

『おい、幸盛よく戻ったなあ！』

『おお！親父様！』

互いに、嬉しそうな顔を浮かべた。

『握り飯、役にたったか？』

『はは、食べながら、逃げ帰りました。』

真柄の顔が悔しさを物語っていた。

『そうか。でもむしろ、これで終わりだのお』

真柄を察した茂助は、深くは聞かずに晴れ渡る空を見上げた。

『今まで、ありがとうございました。すべて茂助様のお陰です。』

『馬鹿！まだ終わってないだろうが！』 真柄からの思

わぬ言葉に、茂助は涙を堪えながら、言った。二人に沈黙が続いた。

『真柄様、最後の評定です。水野様がお呼びです！』 中間が真柄を呼びにやって来た。

『分かった！すぐに行く！』 追い返すように真柄が言った。

『親父様、これにて……。どうか、お達者で。』

真柄は、言葉少なに去っていった。お互いにそれが精一杯だった。

城の中は、女たちも薙刀を手に取り決死の覚悟を表していた。評定の為、諸將が集まっている。

皆、口を一文字に結び、意を決した様子だった。

珠々丸が子供ながら、慣れない具足を身につけ、凧の方と共にやってきた。

一同、頭を下げると、家老の水野が口を開いた。

『皆、よう集まった。もう何も申すまい。』

各人に奮励を願う！海東武士の底力を見せるは、今！一泡吹かせようではないか！』

『おおおおお！！』

自らを鼓舞するように、皆が声を張り上げた。

『大儀であつた。わしからも礼を言う。』片言で、覚えたての言葉を言うように言うと、珠々丸と凧の方は、天主に帰っていった。

一同は頭を下げ、最後の対面を終えると持ち場についた。

水野が真柄を呼び止め

『頼むぞ、真柄！見事な先駆け期待しとるぞ！』

『籠城で先駆けと言うのも変ですなあ？』

『御主の一の丸が踏張れば皆の力となろう！頼むぞ。』

『その難儀な役、承知いたしました。それでは』

水野は、真柄の去っていく背を見ながら

『惜しいのう……。戦国でなければ……。』

この前途有望な男が、死地に赴くのを齒痒く思いながら、見送った。真柄が、任されたのは城の一番最初の防塁である、一の丸。

一番最初に、敵とぶつかる場所である。

先駆けとして活躍していた真柄が任されたのだった。

城の周りにはすでに、黒い塊のように敵の軍勢が、戦の始まりを待っているようだった。

馬のいなく声や今まで見たこともない大勢の軍勢に兵士達は皆、立ちくすのみだった。真柄は、櫓に登り敵の情勢をうかがっていた。『そろそろだな。』真柄は、櫓が降りると兵士達の強張った表情に気が付いた。

『皆、よく聞け！どうしたあ、そのような顔をして。何も恐れることはない！』

ここは、皆が育った場所ではないか？』

だんだんと、兵達の顔が和らいできた。

『わしがいる限り！そうは、負けんぞ！わしを誰だと思つとる！』皆に、笑みが出てきた。

真柄は満足そうに続けた。

『よし！生きるために戦え！死ぬと思うと本当に死ぬぞ！生きようとすればそれが力になる！諦めるな！よいな！』

『おおおおお！！』兵士達は、息を吹き返したように声をあげた。

それでも、一人強張った者がいた。権左である。

籠城となり荷駄部隊も各隊に配属されていたのだった。権左は持った槍を震わせて、真柄の声など耳に入っていなかった。

『どうした、権左！いつもの元気は！お前は後ろ方にいる！邪魔になるなよ！』

はっ、と気付いた権左は

『何だ！何だ？何か言ったのか？』とキョロキョロしている姿を、皆が笑っていた。

茂助は歳の為、戦場ではなく、城の女たちと米を炊いていた。

真柄や権左の事が不安で、堪らなかった。

遠くから、いくつもの法螺貝が鳴り始めた。太鼓や銅鑼も混じっていた。

するとゆっくりと、おおきな波のように、軍勢が城に向かって来た。

『来るか……。』

真柄は、両手で頬を叩き、目を閉じ、少し祈るように顔を俯かせた。

『わわわわああ！！！！』

声を上げ、様々な音と共に敵勢が迫ってくる。

その音が、ゆっくりと大きくなってくる。

真柄は目を見開いて、槍を持つ手に一際、力を入れた。

拾参の巻『鳴海城攻防戦』

『バン！ババーン！』迫ってくる敵勢が、鉄砲を撃ちかけてきた。城の至る所に弾が当たり、身を隠すものもいる。

『怯むな！大丈夫だ！まだまだ遠い所から撃ってる！』

『こちらから、まだ撃つなゆ！決して無だ弾を撃ってはならん！』

鉄砲足輕は、狙いをつけながら動かない。鉄砲の火縄の煙が静かに漂っている。組頭は、真柄の合図を待っている。

敵は、鉄砲避けの竹束を押し立てながら、どんどん近づいてくる。竹束とは、鉄砲や矢を防ぐために竹を、筒状に何本も結んだ盾である。

敵が近づくに従って、鉄砲の威力が増してくる。

また、一塊のようだった敵勢が、その表情までが見えるようになってきた。

城の堀の周りに、防御の為に作られた柵を壊し、突破口を作ろうと始めた。

『今だあ！！！放て！！！』

真柄の声に反応し、組頭が『放て！』と、指示を出した。

城方の鉄砲が一斉に火を吹いた。

柵に取り付く、敵兵が次々と将棋倒しに倒れていった。しかし、怯む事無く、次々と柵にむかつて迫ってくる。

『二番組、放て！！』

真柄の声と共に、入れ替わった鉄砲組が撃ちかけた。

また累々と死体が生まれる。手負いの者は、その場から逃れようと藻掻いている。

城からは、次から次へと容赦なく弾丸の雨が降り注いだ。

敵方は、数に物を言わせ次々と新手がやってくる。

『防ぎ矢を、放て！！』 防ぎ矢は、鉄砲の弾込めの間に速射のできる弓で応戦することである。

しかし所々、柵は破壊され敵が流れ込んできた。

城の塀を登るための梯子が架けられ始めた。

『皆！わしに、続けえ！！鉄砲組は、そのまま撃ち続ける！！』

真柄は、そう言うところの塀の内側に作っておいた足場に飛び乗ると、塀に架けられた梯子を槍で弾き飛ばし、槍を振り敵を薙ぎ倒していった。

真柄は、いきなり塀の屋根に登ると

『わしは！真柄左馬ノ介幸盛じゃ！！かかってこいや！！』

と関の声をあげた。敵方の兵士は、真柄の赤い具足を見て息を飲んだ。

噂の『鬼真壁』がいきなり現れたからである。

そして何よりも、周りを威嚇するように見開いた目にだれもが二の足を踏み、数の利など頭にはなかった。

真柄は、次々に登ってくる兵を槍で突き落とした。その姿に、城兵達も奮い立たった。

塀際の守りは、鉄砲と相まって、城に続く門を壊そうする者を寄

せ付けなかった。

まさに鉄壁の守りと言っても過言ではなかった。

『おのれ真柄め！焙烙を焙烙を持って来い！！』 敵方の、組頭はこの膠着状況を打破しようと焙烙を使うように命じた。

焙烙は、丸い容器に火薬を詰めた物に、火を付け投げ付けて爆発させる。手投げ弾である。

敵の兵士数人が、

腕を回していくつもの焙烙を投げ込んできた。

『焙烙じゃ！！皆、塀から離れる！！』いち早く気付いた、真柄が叫んだ。

しかし、乱戦の中では伝わりきらなかった。

激しい炸裂音と共に兵士達が吹き飛んだ。

鉄砲組は、敵を狙うばかりに気を取られていた為に気付けずに、多くの者が犠牲となった。

城からの鉄砲が止み、真柄達が離れた隙に、敵兵が塀に梯子を登り城内に侵入してきた。

『小口善兵衛、鳴海の城、一番乗り！！鬼真柄、覚悟！どこにいる！！』

その男の、大柄な体格と大槍を持つ姿に、城の兵達はその者を怯えるように距離を取るしかなかった。

『ここじゃ！！！！』

真柄は、その猛者に槍を合わせた。

真柄は、一瞬にして巧みに相手の槍を弾き、その男を突き伏せた。

『怯むことは無い！敵などこんなものじゃ！！よいかあ！！絶対に、

門を開かせてはならんぞ！それ！押し返せ！！』

『おおおお！！！！』真柄の声に合わせて皆が敵に向かっていった。

一の丸は、まさに乱戦状態。押したり、引いたりを繰り返していた。

真柄が、震えてへたり込んで座っていた権左を見つけた。

『おい！権！水野様に援軍をよこすように、言ってこい！ここを落とされたら城は保たないとな！』

まだ、立てない権左を真柄は、権左の頬を張り飛ばした。『生きる為に、戦えと言っただろうが！おまえが行かなければ、皆死ぬんだぞ！』

『わかった。すぐに行きまする！』権左は深く頷くと、真柄に圧倒されたのか、一目散に水野もとに駆けていった。

『相変わらず足だけは早いう。』呟くと、真柄は乱戦の中に舞い戻った。

真柄は、敵に押されている部隊を見つけては加勢に入り、押し退ける。

まさに、獅子奮迅の働きである。

次第に、返り血を浴びた真柄顔が赤黒くなっていた。

赤い具足を着ている真柄は、その姿を『鬼真柄』からまるで『赤鬼』の姿へと変えていた。

『水野様！！真柄様から援軍の要請にございまする！！』

権左は、水野のいる天守に駆け込んだ。

『ご苦労、して情勢は？』

『今のところは、一進一退ですが、真柄様がここを取られては、城はそうは保たないと。』

『さすが真柄じゃ！よくやってくれる！

あい分かった。わしの部隊を送る。すぐに送ると伝えてくれ！』

そう聞くと、権左は急いで真柄の元に戻った。

城を出た所で茂助の声に呼び止められた。

『おい！真柄は無事か？』

炊き出しの途中なのか手には、盆の上に握り飯を持っていた。

『今！急いでるだ！早く行かねば！真柄様は元気じゃ！』

権左が、走り出そうとすれど、

『おい！！権左！待て！もう昼過ぎだ、これを持ってけ』

持っていた握り飯を無理矢理持たせた。権左は走りにくそうに走り去っていった。

一の丸に近づくと、戦う男たちの声が聞こえてくる。

『真柄様……。』一の丸に着いた権左が見たものは、新手の敵が現れ混戦状態の状況だった。

敵味方、死者や怪我人に溢れていた。

権左は、真柄が言い聞かせた言葉を思い出し、意を決して中に入り叫んだ。

『皆様方！！もう少しで、水野様の援軍が参りまする！！！！もう少しの辛抱ですぞ！！！！』

『おおお！！大義だ権左！』

槍が折れ、刀で敵と鏑迫り合いをしていた、真柄が言った。
真柄に合わせ、兵達も声を上げ力を振り絞る。

その時『危ない！！』

権左が気が付いた。

だが、すでに遅かった。

城の塀の上から真柄を鉄砲で狙っていたのである。

鉄砲の甲高い音が鳴った。弾は真柄の足を貫いていた。

鏑迫り合いをしていた真柄の態勢が崩れ、敵に覆い被るようになり敵が馬乗りのようになった。

『わわあああ！！』

『ドスッ。』

馬乗りになっていた男に、横槍が刺さっている。

刺さる槍が震えていた。権左が落ちていた槍を拾い上げ、突いていたのだった。

真柄は、足をかばいながら立ち上がると、震える権左の槍を握り引き抜いた。

権左は槍を持ちながら、息を荒くし、腰を抜かしていた。

『やればできるではないか。』

真柄が、痛みを耐えながらも笑みを浮かべながら権左に言った。

『へへっ。』

権左は引きつりながら、笑い返した。

『わわあああ！！！！』

その時、水野の援軍が傾れ込んできた。

『それ！！今だ！押せ！押し返せ！！』

真柄は、撃たれた足など気にも止めずに、前に前に繰り出した。

『ドオオン。ドオオン。』間の延びた、太鼓の音が遠くから聞こえて来た。退却を表す『退き太鼓』である。

『なんとか守りぬいたの…。今日はここまでらしいな…。皆よくやつてくれた。』真柄は、戦いぬいた兵達に言葉を掛けた。

『ずいぶんと減ったのう。』

真柄が辺りを見渡した。辺りに見えるのは、敵味方、問わずただ死人の姿ばかりであった。

抱き抱えて泣いている者も多く見かけられた。

この日、一の丸では実に四度、数に勝る敵を押し返したのだった。

しかし、この華々しい戦果も、彼らには勝利とは、思えなかった。

ただ、仲間達が、次々と倒れ死んでいく。

倒れた仲間達の姿は、いずれ変わる自分の姿にも見えてた。

一つ一つ大事なものを失われていくだけ、それは自分の中身が削られていくような気持ちであった。

海東家は、この一戦で、ほぼ半数の兵を失なった。

城の中は傷兵で、溢れて

もはや二度と、敵を防げるような戦う力は残されてはいなかった。

り飯を無言で口に運んだ。

兵士達は、炊きだされた握

太陽は、すでに西に傾いて、いつの間にか時間だけが経っていた。

拾四の巻『灰塵に帰す（1）』

城を夕闇が包みはじめた。篝火が、城のあちこちで灯っている。

城の兵達は、一様に口を閉ざし城の中は静かだった。兵達は、着実に近づいている死に怯えていた。

茂助も疲れ果て、城の壁にもたれ掛かっていた。

『おい！みんな！ちよつと見てみる！』

休息を得ている群衆に向かって櫓の上から声がする。

『今度は、なんだ？戦は明日までないだろう？』

皆、真柄を敵と見間違えた若い物見を、疑いながら見上げた。

『いいから！見てみる！街や村が燃えてる！』

物見は、慌てながら指を差している。

『なんだと！あつ…。』 街や村の方が、ぼんやりと明るく光っている。

また、馬のひずめの音が、鳴り響き、その音が向かう所から次々と新たに火の手が上がっている。

『こんな小さな街や村を焼いて何になるってんだ！』

『まったく、ひでえ事しやがる…。』

城兵

達は拳を握り、震わしながら、生まれ育った場所が焼けるのを、ただ見守ることしか出来なかった。

村が

焼けている事を知った権左が、茂助のもとへ駆け込んできた。

茂助は、うとうと首を揺らしていた。

『茂助様！茂助様！大変です！起きてください！』

権左は、茂助を揺すって起こそうとした。

すると、パツと目を覚ました茂助は

『な、何だ！夜襲か？』

権左の顔を見返した。

『村が、村が燃えてるんですよ！！』

そう言つと権

左は茂助の腕を取つて、茂助を連れ出した。

茂助は、目を擦りながら権左に引かれていった。

壁の周りには、すっかり人だかりが出来ている。

茂助にも、重大さがすぐにわかった。

『あれを見てくだされ！』権左が言つ先には、火に包まれた街や村から煙が上がっている。
夕闇の中でも、はつきりとわかった。

『なんて事を……。』

茂助も他の者と同様に、言葉など出なかった。

ただ時間が流れ、何も出来ない自分達の無力さを感じながらに立ち尽くしていた。

『茂助様！！茂助様！！俺だよ！』

城の下から声がする。

『親父！！親父じゃねえか！』

権左が身を乗り出して言つた。

『何してるんだ！こんなところで！村の皆と山の中で、隠れていろつて言つたじゃないか！』

権左が父親である権平をまくしたてる。

『村が燃えちまつたんだよ！生き残つても、どうしたらいいんだ！村の皆もそこに來てるんだ。』

茂助様、わしらはどうしたらいいんだ。』

権平は、取り乱した様子で訴えた。

『生きていればなんとかなる！この城の裏手の山に、洞穴がある！そこで伏せるんだ！大丈夫だ！』

茂助がどれだけ明るく語り掛けても、権平は納得せずにその場に留まったままだった。

茂助もその様子に、何を言ってもいかに言葉に困ってしまった。

『皆のもとへ行つてあげてください』

茂助の後ろで真柄が立っていた。

『お前その足、怪我したのか！！大丈夫か？』

真柄の足に巻かれた、包帯を見て茂助が心配そうに問いつめた。

『なあに、鉄砲の掠り傷で

すわ！

それよりも、早く村の皆を安心させてあげてくださいませ！』

『それは、出来ない…。』

皆を残して城を出るなど。』

『何を言っておられます！民のために生きるのが茂助様でしょうが。』

『しかし…。』

茂助は、黙り込んでしまった。

『皆、集まってくれ!!』何か思いついたように真柄が声を張り上げた。

近くにいた三十人ほどが、その声に応じて集まった。皆、城下の村から集められた百姓の兵ばかりである。茂助も含め、兵達は何が始まるのかと不思議がった。

『よいか!これからお主らは、次の敵の襲来に備えて城の横にある、あの山にて伏兵として伏せろ!』

合図は城より狼煙を上げる!

伏兵隊の組頭は、菅沼茂助直隆!!

すぐに、城を出る支度をしろ!!以上である!!』

集められた兵達が、慌てながら散っていった。

『一体、どういつもりだ!!』

茂助は、珍しく激しい口調で、真柄に言い放った。

『申し訳ありません!』

こうするしか方法が浮かばなかったのです。

茂助様には、生きてほしいのです。死ぬのは我々侍達だけで十分です。』

『わしに、何が出来るというんだ!』

茂助は、感情的に言い返した。

『こんな時代だからこそ、多くの者に笑顔を振り撒き、笑顔に変えてあげてください。』

私は、茂助様のおかげで…。』

真柄は、涙に言葉を詰まらせながら必死であった。

『お前は死んでしまふのだな。』

茂助もまた、

目に涙を溜めている。

『これも武門の習いと言うものでしょう。

まったく、侍とは厄介なものですな。ハハ。

それに、おふうを一人には出来ませんからな。』

真柄は、涙を拭いながら笑顔を作った。

最後は、笑顔で別れようと決めていたからである。それは、真柄が茂助から教えてもらったものであったからである。

『侍大将真柄様からの

最後の命令、この茂助、承知致しました！』

そう言うとき茂助は、いつもの笑顔に戻っていた。

『ハハハハ！いつもの親父様だ！』

二人とも、目

を赤くしながら笑っていた。

悲しさを紛らわし、そして吹き飛ばすように。

『なんだ？楽しそうなの？』

権左がゆっく

りと、やって来た。

『お前は出立の準備は出来たのか？権左！』

涙を悟られぬように、茂助が言う。

『何言ってるんだい、とつくに出来とるよ！

それにみんな、待つとるよ！』

『そ…そうか。すぐに行く門の前に集めといてくれ。』

す！』

権左は、すぐに駆け出していった。

『では、そろそろ行くとするか。』

茂助が、行こうと背を向けた時に真柄は、すつと頭を下げた。

『真の親父と思っておりました。

この真柄、親父様無くては居りませんでした。本当に有難う御座いました。

どうかご無事で…。』

『手の掛かる子供だ。最後まで親を泣かせおつて。

わしのような者を親父と呼んでくれて、礼を言うのはわしの方だ。』

茂助は、真柄に背を向けたまま言った。

茂助が、城を

出るとき振り返ったが、真柄は見送るように頭を下げたままだった。茂助は城を出ると、すぐに門が閉ざされた。

辺りを暗闇が包み込み、また、その暗闇が涙を隠してくれたのだった。

拾伍の巻『灰塵に帰す(2)』

茂助が、重い足取りで城を出ると、城の外にいた権平達が駆け寄ってきた。

『まったく仕方ないのお！お前達はわしがいなかったら、何も出来んのか？』 茂助が口を開くと、権平達は安堵した様子で、笑顔に変わった。

茂助の目は涙で赤くなつてはいたが、城の明かりだけの薄暗さに誰も気付くことはなかった。

『茂助様！村の皆はあっちにいるんだ！』
権平は森の中を指差している。

『よいか、わしはちよつとした役目を仰せ使つてな。先に、城の裏手の山にある洞穴に行つていてくれぬか？
後からすぐに行くから？よいな？』

『わかった！皆を連れていくよ。茂助様が来ると、皆に伝えたら喜びますぞ！』 そう言つと、権平は蟹股でバタバタと走つていった。

『よし！我らも、あの山に登るぞ』

茂助は、真柄から預かつた兵達を連れ、真柄に言つた通りに伏せるように、山に登り始めた。

暗闇に足を取られながらも、ゆっくりと登つていった。

『この辺りでよいか。』 そう言つと、山の中腹にある、少し開けた草原に兵達を集めた。

『皆いるな？よいか、皆ここで解散を命じる！
それぞれの村に戻り、家族の元へ帰つてやれ。以上だ。』
兵達は、茂助の言葉に驚いたように騒ついた。

『いったい、どうゆう事なんだい？真柄様に怒られちまうぞ？』

兵の一人が、茂助に問う。『ええから、

お前達百姓は、死ぬ事はない。後はわしに任せておけ。』

『茂助さんは、どうするんだい？』

『これ！わしは、こう見えても侍だぞ！
最後まで見届ける。』

『あつ！そうだった！茂助様は、侍だったのお…。』

『ハハハハハハ！！』 闇を裂くように笑い声が響いた。

『馬鹿！！大きな声を出すな！敵兵に見つかったらどうするんだ！
見つかる前に早く行け。』

茂助は、兵達を先へと急がせた。兵達は、一人一人茂助に礼を言うように頭を下げると、次々と去っていった。

後には、茂助と権左だけが残された。眼下には今までいた城が見えている。

『こんな事して、よかったのですか？狼煙が上がったらどうするんですか？』

権左が、理解出来ない顔をして茂助を見た。

『はは。これがわしの役目だったのだ…。幸盛は狼煙など、上げはせんよ。』

茂助は、深くは語らずに、穏やかな表情のまま権左に言った。

『へっ？なんの話ですか？さっぱり分かんないですよ！』
権左は不満そうだった。

『ところでお前、背中に背負ってるのは何だ？』

茂助が言うように、権左は一際大きな袋を背負い、腰にも袋を下げ

ていた。

「これですか？」

山に伏せるって言うから、城の中から食い物をくすねてきたんですよ！

何でもありますよ！握り飯に豆、味噌だつて！」

「まったくお前は、そうゆう事は得意だな。」

居ないと思ったら、そんな事をしていたのか。」

「そうだ！村人達は二、三日まともな物を食べてはおらんだろう。持っていてやろうではないか？」

「そうしましょう！皆、喜びますぞ！」

二人は、村人

達が潜んでいる洞穴に向かって、獣道のような細い道を歩いていった。

「おい！足音がしねえか？」

洞穴の中の村人が気が付いた。

「ああ、本当だ！とりあえず奥に隠れる」

村人達は、体を寄せ合つて、息を殺した。

「茂助様！あそこだ！」

権左が、洞穴からこぼれる焚き火の明かりに気が付いた。

だが、洞穴に入っても誰もいない。静かに、焚き火だけが燃えている。

茂助も権左も何かあったのかと、不安になった。

「あれ？おー

い誰もいないのか？茂助様が来たぞ！」

「茂助様？権左か！」

奥から声が聞こえてきた。

「何だ、茂助

様か！

おら、てつきり敵兵だと。」

権平が、恐る

恐るやって来た。

『まったく、親父はいつも早合点で仕方ないな！』

権左は、父親の権平の肩を叩いた。

『うるせえ！お前は黙つとれ！』

茂助様あ、よう来てくれた。みんなで待っていたんだ。」

それに伴って続々と村人達が、出てきた。

村人達の顔や衣服は黒く汚れ、これまでの苦労を物語っていた。

『茂助様だあ！茂助様！』と村人達が、茂助を囲むように集まった。

『皆、無事で何よりだった。だが、村が焼けてしまったのは、我々の不徳の致す限りだ。申し訳ない。』

茂助は深々と頭を下げた。茂助の申し訳なさそうな様子に、村人達は、返す言葉など出せずに俯き黙ってしまった。

『ささやかだが、食い物を持ってきた。皆で平等に分かち合おう。』

茂助は、皆を座らせた。

『ご苦労だったの…。』

茂助は、戦場で兵達に配るのと同じように一人一人に食料を配っていた。

村人達は茂助に手を合わせ、感謝するように受け取っていた。

そんな村人達の姿は、茂助には、居た堪らないものだった。自分達、武士の為に村まで焼かれてしまったのに、自分を慕い、感謝してくれる。

だが、自分には何の力もない。

茂助は、顔を強ばらせていた。

『どうしたんだい？茂助様。怖い顔をして、泣いとるのか？』

村人達が、茂助の顔を覗き込んだ。

『なにい！わしが泣いとるだと！！』

よし！権左歌え！』

茂助は、無理矢理に元気を出すかのように声を張り上げた。

『えっ？歌？』

握り飯を食べていた権左が口を膨らませたまま、茂助に振り返った。

『お前はいつまで食っているんだ。全部食べてしまふ気か？早くせい！いつもの歌だ！』

茂助が、急かすように権左に歌を歌わせた。

その歌に合わせ、茂助がいつものように、おどけながら踊りだした。

いままで、怯えていた子供たちがクスクスと笑い始めた。

静かな洞穴の中が、徐々に明るくなっていく。茂助もじっとしていても、真柄やこれからの村人達の事を考えてしまい、押し潰されてしまいそうで、ただやみくもに踊った。

いつのまにか洞穴の中は、戦が起こっているなど忘れるくらいに、久しぶりに和やかな雰囲気にもまれていた。

ここだけ見ると、まるで村祭りの光景のようであった。

しばらくして、村人達は横になり、眠りに付いた。

茂助の存在に安心したのか、村人達は柔らかい寝顔を並べている。

茂助は、洞穴の壁にもたれ掛かったまま、一睡も出来なかった。

真柄や、城の兵士達のことばかり考えていた。

茂助にとって、こんなに長く感じる夜は、初めての感覚だった。

春とはいえ、まだまだ肌寒く、月も出ていない暗い夜が、ゆっくりとまた、静かに更けていった。

拾六の巻『灰塵に帰す(3)』

うつすらと夜が明け始めた。空が青くなり、辺りを明るくし始めている。

『わあああああ!!』

城の方向から、人の声や足音、馬や鉄砲の音などが交じり、地鳴りのような音が聞こえてきた。

洞穴の村人達は、その音に目を覚ました。

『何の音だありゃ?』

『きつと、木之下勢達の朝駆けだろうな。海東も、これで終わりだな…。』

『あれっ! 茂助様が居ないぞ!』

権左が辺りを見回しても、茂助の姿はなかった。

『おい権!! 急いで探してこい!』

『わっ、わかった!!』

村人達の声に背中を押されるように、慌てて洞穴の外へ飛び出していった。
朝の冷たい空気が、眠気な

ど一瞬に消した。

権左は昨夜、茂助が言っていた『ここで見届ける。』という言葉を思い出し、兵達を解散させた場所に行ってみることにした。

案の定、その場所に茂助が座り込んでいた。

『よかった…。はあはあ。』

いままで、走りっぱなしだった権左は、息を整えながらゆっくりと

茂助に近づいていった。

『あつ……。』

権左が城の方に目を向けると、敵が城を取り囲み、すでに門などは壊され、城の中へと次々に敵勢が傾れ込んでいる。城からは、至る所で火の手が上がっていた。

『茂助様……。ここに居られましたか。皆が心配しておりますぞ。』

権左が声を掛けたが、茂助からは反応が無かった。ただ、城を眺めていた。

『権左。狼煙が上がっておるわ……。』

『えっ？狼煙？』

城では、様々な物が焼けているのだろう。

狼煙のように黒い煙がいくつも上がり風の流れて、こちらの方まで流されて来ていた。

茂助は真柄を思い、涙を流しながら見守っている。

『茂助様……。』

権左は、それ以上言葉が続かずに立ち尽くし、茂助と共に城が焼け落ちていくをいつまでも見ていた。

『権左。しばらく一人にさせてくれんか？』

わしは大丈夫だ、そう村人達に伝えてくれ。』

権左は、茂助に言われるがまま、来た道を引き返していった。

一方で城の中は、世にもお

ぞましい光景となっていた。

城は、兵達の骸が溢れ、寄せ手の兵達はそれを踏み越え、手柄となりそうな首を討ち取りながら、本丸に向け、前へ前へと進んでいた。

『水野様。』

海東に仕えている忍びの黒雲が、家老の水野のもとに戻ってきた。
『うまくいったか？』

水野は心配そうな顔で言った。

『はい。水野様の仰せ通りに、珠々丸様方は抜け穴より無事に城外に出られました。』

黒雲は、表情も変えず冷静に答えた。

『そうか。黒雲、ご苦労だったな…。』

最後に、この水野の最期の頼みだ。すまないが、いま少し若殿を見守ってはくれないだろうか？頼む。』

水野は、丁寧に頭を下げ黒雲に伏して願った。

『かしこまりました…。』黒雲はそう言うと、言葉も少なく早々に去って行った。

『やれやれ、最後まで愛想の無い奴じゃ。
だが、これで望みは繋がったかのう…。』

その時、足音を鳴らしながら、傷ついた武者が水野の元へ来た。

『水野様！二の丸も既に敵の手に落ちました。あとは本丸を残すのみです。』

申し訳ありません。もはやこれ迄かと…。』

その、若武者の表情は悔しさに満ちていた。
『あい解った…。よく伝え

てくれた。大義。

よいか、すぐに城に火を放て！

海東武士の新たな旅立ちじゃ……。敵に邪魔をされてはいかん。』

『はっ！かしこまりました！すぐにでも。』 若武者は、慌

てるように急いで戻っていった。

そう言い付けると、水野は奥の間に入り、静かに戸を閉めた。腰に差した脇差しを取り、具足を脱いだ。

今は亡き、殿が座っていた上座の場所に向かい合うように、腰を下ろした。

まるでその場所に、いままでの主君、海東資長が居るかのように水野は語りだした。

『殿、爺には少し荷が重すぎたわい。年を取りすぎましたかなあ……。ハハハ……。』
水野は資長の守役を努めた人物でもあった。

『お叱りは、あの世でたつぷりと……。』
そう言くと、脇差しを抜き自らの腹に突き立て、自害して果てた。

水野の命により、本丸付近は激しい火に包まれた。

その火の勢いは、敵勢を寄せ付けけないのに十分であった。

『おふう……。おふう……。』 真柄は、うわごとのように呟きながら、燃えていく城内を妻である、おふうを探し彷徨っていた。

真柄は髪を振り乱し、矢や鉄砲に体は傷つき、その傷から出る血が、道しるべのように真柄の通った跡に続いていた。

どれだけ使ったのか、曲がりくねった刀を杖のように床に突きながら、おふうとの約束を果たす為に進んでいった。

城の中は静かであった。

既に、場内には自害して事尽きた者ばかりであったからである。

真柄がおふうを探し、部屋を巡っていたが、どこに行っても、倒れた人ばかりであった。

自ら、腹を切る者もあれば、互いに刺し違える者、我が子を危め、涙を流したまま、死んでいる母親。

そんな、光景を見るたびに真柄は傷ついた体に鞭を打ち、おふうを探す足を早めた。

やがて真柄は、城の大広間に辿り着いた。

ここには、城で働いていた女達の亡骸が目立っていた。

真柄は、累々としている亡骸を分け入るように、おふうを探したが、真柄は死んでる訳が無いと信じ込んでいた。

『おふう……。』

壁に寄り掛かるように倒れていた、おふうを見つけた。

大きくなっていたお腹を見て、真柄はおふうと確信したのだった。

『おい！わしだ！おい！』どれだけ揺すっても、その体には力が無く、おふうの冷たくなった体の感覚が、真柄の手から伝わってきた。『どうしてだ！わしの事を待っていると約束したではないか……。馬鹿たれ！』

真柄は、おふうの体を抱きながら、体を震わせた。

『ん？』

真柄は、おふうの手に何か握られているのに気付いた。

おふうの手を解くと、何度か折られた紙が、握られていた。

『文か？』

真柄は急いで、その紙を開いた。

所々、血で滲んではいたが、おふうの綺麗な文字で綴られていた。

『旦那さま。お約束を破り

申し訳ありません。

二の丸が落ちたと報を受け、皆で意を決しました。

あなた様の事ですから、かならず私を捜し出し、この文を読んでくれると思います。

三途の川は渡らずに、お腹の子と待つております。

手紙のことを知らなかったら承知しませんよ。

お先に逝くことをお許しください。』

と書かれていた。

『ガハハ。まったく、お前は最後まで、強い女子じやの…』

もう何も言うことはない、おふうに、言い返していた。

『さて。いつまでも、待たせておく訳にもいかな。この手紙も、一緒に持つて行ってやる。待つておれよ。』

真柄は、脇差しの短刀を抜くと、おふうの手紙と一緒にしっかりと握り、首に押し当てた。

『親父様…。真柄、このように、合い成りました…。おふうを迎えに行きまする。』

当てた刀を振り下ろした。真柄は鮮血と共に、おふうの体に折り重なるように倒れ込んだ。

真柄左馬ノ介幸盛。この時三十四歳、戦国の渦の中にまた一人、前途有望な若者が飲み込まれていった。

城は、すでに紅蓮の炎に包まれている。

ここに、海東有りと言われた時代もあった名族、海東家も炎と共に灰塵に帰した。

『エイ、エイ。』

『おおおおおおお！！』

『エイ、エイ。』

『おおおおおおお！！』

城を囲み、焼ける城を眺めていた寄せ手の軍勢からは、至る所で天を突くような歓喜の声が上がっている。

茂助は、その場を動けずに目に焼き付けるように、その光景を見続けていた。

拾七の巻『武士の種類』

いままで、空は雲に覆われぼんやりとしていたが、その雲の合間から朝日が差し始めた。

鳴海の城に攻め込んだ各部隊から大きな声が挙がる中、その大将である、木之下秀家は苛立っていた。

『珠々丸の遺骸は見つからんのか！』

秀家の鋭い視線が、家臣らに向けられた。

『城は火に包まれ、近付けず未だ確認はとれません。しかし、幼子でございます。ご心配には及びませんでしょう。』

秀家の馬周りの者が言った。『たわけが！！』

秀家は、その者を殴り飛ばした。

『城を落とせばよいというものではない！後顧の憂いは残してはならんのだ！』

逃がせば、いずれ牙を向いてくる種にもなりかねんだろう！』

秀家の声が響き、歓喜に沸く陣が静まり返った。

『も…申し訳ありませんでした。』

馬周りの者は、体を震わしながら伏して、詫びていた。

一同は、秀家に体を向け直立したままだった。

秀家は鋭い目を向け口を開いた。

『珠々丸は、すでに城外に落ち延びているやもしれん。

さつそくにでも山狩りを始めろ！海東の者を見つけたものには褒美を与える、この辺りにも触れ回れ！！』

『はっ！！！！』

慌てて、武将達は四方八方に散っていった。

木之下秀家、この大將は若いが武將としての手腕は確かなものだった。

しかし彼は、完璧を求める性格の持ち主であり、常に眉間にしわを寄せ、誰も笑顔など見た事はないと言うほどの厳しい男であった。

従う武将達は、常に秀家の前では緊張し、そして、秀家の感に触わらないように、ただ必死に働らいていた。

古くから続く名門の武家ではない新興勢力である木之下家は、秀家の父である木之下長秀が、一代で今の勢力のほとんどを作り上げた大名家であった。

そんな長秀は、子の秀家に剣術、馬術、兵法、国の治め方などを徹底して秀家に叩き込み厳しく育て上げた。

そうした行動は、強くなくては生きれない戦国の世の中でも生き抜けるようにと、父親なりの気持ちだったのだろうが、その能力と引き替えに秀家は笑顔を浮かべる事などは、全く無くなっていた。

『山狩りだ！急いで準備を

始めろ！！』

『海東の者を見つければ褒美が貰えるぞ！！こたびの戦の総仕上げだ！ぬかるでないぞ！』

各侍大将や組頭から檄が飛び、山狩りの準備が始まった。

壁に耳あり、障子に目あり。どこから聞き付けたのか

百姓達が懸賞首や金に変わる武具や刀剣類を求め、竹槍等で武装し

「落ち武者狩り」

を始めている者達もいた。

それは、戦の度に田や畑を荒らされ、家を焼かれ、女を犯される。

そんな侍達へ向けた、百姓達の復讐のようでもあった。

その頃茂助は、ぼんやりと

したまま座り込み、焼け落ちる城を眺め続けていた。

『親不孝もんが…。先に死におつて…。今頃は、おふうと一緒にのう…。』

真柄との思い出ばかりが、頭の中を駆け巡っていた。

『茂助様～！！～』

権左の声が近づいてきた。

『どうしたんだ？権左？』

戦は終わったんだぞ、なにかあったか？』

『茂助様！ここにいたら危ないですよ！どという訳だか、山狩りが始まるみたいですぞ！』権左は、水を汲みに言った場所で敵兵に遭遇し、兵達の会話の中で山狩りだと聞いたらしい。

『恐らく、珠々丸様が見つからなかったのであろうな…。』

茂助は冷静に権左に言葉を返した。

『早く逃げてくださいよ！茂助様！』

『わかったわかった、とりあえず、村の皆の元へ戻ろう。』

茂助は、急かす権左を尻目にゆっくりと腰を上げ、皆のいる洞穴へ向かっていった。

権左は辺りを警戒して落ち着かない様子であった。

洞穴の前には、権左の父親である権平が首を長くして待っていた。

『心配しましたぞ、茂助様。皆も待ち兼ねておりましたぞ。』

洞穴へ入ると、不安そうな顔をしていた村人達の顔が茂助を見て緩み、和み始めた。

しかし、茂助の顔は珍しく険しかった。

『どうしたんだ茂助様？具合でも悪いのかい？』

皆が茂助を見つめていた。

『大事な話があるのだ、皆静かに聞いてくれ。』

いままでの茂助と違った態度に何事だと、口を閉じた。
一呼吸おいて、茂助が話し始めた。

『皆、ご苦労あった。戦は終わったぞ。』

『そういう事かい？元気出してください。茂助様なら武士で無くても食っていけるさ！』

権平が口を挟んだ。しかし、茂助が表情を変える事はなかった。

『話は最後まで聞けと言うつとるだろ権平。』

『続けるぞ。』

戦は終わったが、今、周りの山では、山狩りが始まったようだ。おそらく、珠々丸様が城外に逃げたのだろう。

この洞穴に敵の手が伸びるのも時間の問題だろう。

仮にも海東家組頭の私がいればお前達にまで危害が及ぶやもしれん。

『

村人達は、すっかり不安な顔に戻っていた。

『そこで、私に考えがある。わしの最後の願いとして聞いてくれ。よいな！』

わしを縄で縛り付け、木之下の武將の陣まで届けて欲しいのだ。』

『そんな事出来る訳なからう！！』

茂助様、そんな事言わんでくれ！！』

権平が叫ぶように言ったのに村人が続いた。

『そうだ！できねえ』

『一緒に生きるべよ？茂助様。』

『何でそんな事言っんだ！』

村人達は騒つきながら茂助に迫った。

『わしにとってな、村が一番大事な主君だったんだ。だがしかし、今すべてが、焼けて無くなってしまったではないか…。これからどうすのだ？』

わしを捕らえた事にして、敵陣に届ければ、いくらかの褒美も出るだろう。

その金で、村を作り直してもらいたいのだ。』

茂助は涙を浮かべながら、話したが村人達は黙り込むばかりで納得することはなかった。

時間ばかりが過ぎていった。

『わかりました…。』

皆が俯いている中、権左が言った。

すると権左は、立ち上がり茂助に近づいた。

『縛ればよろしいのですか？』

茂助が頷くと、権左は縄を出し茂助を縛りだした。

『コラ！権左！なにしとる！やめんか！』

『自分が何してるかわかってるのか！』

村人の中から、止めさせようと何人かが飛び出した。

『これ以上、茂助様を苦しめるなよ！！！』

俺だってこんな事したくない！』

権左の怒鳴り声に、飛び出した村人は動きを止めた。

『茂助様だって俺達に、こんな事言いたい訳ないだろう。』

大好きな茂助様の考える事に、俺達も最後まで答えてやろうじゃないか？なっ…。』

権左をはじめ、村人達が泣き出してしまった。

『しょうがないなあ。』

皆これから泣いてはいれんぞ！一から村を造のだからな。

それと、わしは今、独り身だから誰も弔ってはくれんのだ。

墓にうまい米の飯を誰が備えてくれるんだ？

お主達に頼みたいんだよ。わかつてくれるな。』

茂助は涙を流しながらも笑顔を作り、やさしく言い聞かせると、
やっと村人達が泣きながらも頷いた。

『よし！早くせんと、敵が来てしまふな。権左行くぞ！！お前が縄を引け。

皆、権左が戻るまで、ここで、おとなしくしているんだぞ！

敵方が来たとしても、百姓だけならば、手を出すまい。

それでは権左、行こう。』

茂助が言くと、権左は涙を拭い茂助を縛った縄を握り、洞穴を出ていった。

残された村人達は皆、拝みながら見送くる事しか出来なかった。

茂助は、最後に村人に向かって振り返り、深く頭を下げ権左と山を下りていった。

春の日差しがやさしく照りつけていた。

二人とも無口に、歩いていった。

権左は、縄を手に持っていたが、茂助に引っ張られているようだった。

そして、このままずっと、敵陣など無ければよいな思いながら俯きながら歩いた。

『おい、権。』

お前は立派になったなあ、お前があんな事言うとは、思わなかった

ぞ。』

前に行く、茂助が話し掛けた。

『へへっ。初めて誉めてくれましたな…。』

少し照れ臭そうに、権左が答えた。

『その、どうして茂助様は、こんなに優しいんだい？』権左は、今まで聞けなかった事を聞いてみた。

『なにかと思えば。そんな事か。』

そうだなあ。権左は、侍が好きか？』

逆に茂助が問うて来た。

『えっ？うゝん、わしは嫌いだ。威張ってばかりだし。』

権左は、すぐに言葉を返した。

『ハハ。わしも、同じだよ。』

若い頃は、侍らしかったのかもしれないが。

いつの間にか、武士とは何の為に居るのかと考えるようになってな。こんな事を考えるようだから、わしには、侍なんぞ向いてなかったのだろうな。

それに、武士達には疎まれたが、馬鹿やっついてよかった。

人を笑わせ、優しくしていれば、優しさは自分にも帰ってくるんだ。こんな時代に、そんな事を知る事の出来たわしは、幸せ者だ。』

笑って答えた茂助に権左は足を止めた。

『じゃあ、なんで死に行くんですか！いつまでも私達を笑わせて下さいよ！』

権左は、いままで我慢していた気持ちを強い口調で言った。

『よいか権左。』

侍とはな、民の為にいるものだと考えている。

民の支えなければ、ただの無用者だ。だからこそ、民の幸せの為に命を懸けなければならんと思う。

これが、わしの侍として、最後まで貫きたい武士の意地だ。』

振り返った、茂助の目は力強く、意志の強さを物語っていた。

天下を盗るなどではなく、ただ人の為に生きたい。

生きる目的は全く違うが、その誇りの高さは一国の大名並みであった。

『そんな悲しい顔をするなあ。行くぞ。』

あつ、その前に縄を解いてはくれんか？歩きにくくてな。』

『ハハハつ、私も、まだ縛るのは早いと思っておりました。』

権左は思わず笑ってしまった。

『気付いたら、早く言え！まったく！』

縛られて手が痺れたのか、両手を振って最後まで、ふざけてみせる茂助を見て、権左は、茂助の例え様の無い大きさを感じていた。

『さて参ろう。』

歩きだした茂助の後を、権左は追った。

拾八の巻『置き土産』

それからは、互いに無言で歩いていった。

『おい！権！敵兵じゃないか？』

木の間から人影が見えた。

その兵達は陣の警護の兵なのだろう。後ろには陣が見えた。

二人は、木陰に身を隠した。

『よいか、権左。』

わしの言う通りに、言うのだ！

海東の武將を捕らえました。私は、この近くの百姓に御座います。

我が村の者の代表としてこの者を連れて参りました。これだけでよい！後はわしが何とかする。いいな。』

『はいっ、わかりました。やってみます！』

少し怯えながらも、権左は頷いた。

すると茂助は、足元の手に取り、土を顔に擦り込むように顔に付け、汚しはじめた。

『さあ、縛ってくれ！』

茂助は、後ろに手を回した。

権左は縄を取り出し、しっかりと縛り付けた。

『ようし。上出来だ。行くぞ！』

茂助は、しっかりと縛られているかを確認すると、権左に引かれ敵陣に向かって歩いて行った。

『何者か！？』

茂助達に気付いた、敵兵が数人駆け寄り、槍の穂先を向けている。

茂助が、権左に合図を送るように、縛られた手を動かした。

『わ…私は、この辺りの百姓にございます。』

この者は、海東の武将でございます。

むっ、村の者で捕らえたこの者を、代表として連れて参りました。』

緊張して言う、権左を怪しげに兵達は見ていた。

『わしは、海東家筆頭家老、水野忠左衛門。そなた達の大將にお取り次願いたい…。』

茂助は、最初から水野に成り済ますつもりでいた。

褒美の量を増やすためである。

茂助は直ぐには、ばれないように顔を汚していたのだった。

権左は、茂助の言うことに驚いたが、茂助に言われた通りに何も言わなかった。

兵達も、いきなり現われた大將首に驚き急ぎ、主君のもとへ走った。

『殿…！！海東の家老、水野を捕らえたという百姓が参りました！』

『なんだと！すぐに通せ！』

茂助と権左が陣中に通された。

『お主が、水野殿か？』

某は、木之下家が家臣の柴田右近と申す。』

幸いに、この柴田という武將は水野の顔を知らない様子だった。

『再起を図るべく、城を抜け出たが、百姓共に捕まる始末。』

『ガハハハ！年老いて、百姓に捕らえられるとは惨めだの。』
勝ち戦に、上機嫌なのか、あまり疑いはしていなかった。

『武運もこれまで…』

わしを差出し褒美を貰えと申した次第。
最後くらいは、民の為に思いましたな。

どうか、この願い汲んで貰えないだろうか？』

『民の為だと？最後の強がりか？

ハハハ！…まあ、よいだろう。

おい！あの者に褒美を取らせ！』

権左の前に、金の入った巾着が幾つか置かれた。

『過分の御計らい、水野、礼を申します。』

『なんの！安い買い物じゃ！ガハハハ！

この者を、殿のもとへ連れて行く！連れていけ！』

茂助は、両腕を抱えられるようにして連れて行かれた。

茂助は、権左に顔を向け笑顔を見せた。

複雑な気持ちが権左の表情に表れていた。

『お主も、もう帰ってよいぞ。ご苦労だった！！』

言い残し、柴田は機嫌よく去っていった。

権左は、目の前の巾着を懐に入れると、足早に陣を出た。

逃げるように走り出した。権左は、途中の森の中で立ち止まると、

力が抜けるように崩れ落ちた。

『茂助様…』

権左は、地面に突っ伏したまま動けなかった。

茂助の言う通りにしただけが、自分が敵に売り渡したように感じ、
罪悪感のような感情に苛まれていた。

森に差し込む太陽の光が時が過ぎるのを知らせるように、木々の影

を長くしていた。

権左は、ゆつくりと皆の待つ洞穴に歩みはじめた。少し前に茂助と歩いてきた道の景色すら、遠い思い出のように感じられた。

洞穴に着いた頃には、陽の光も弱くなり、薄暗さも感じられた。しかし権左は、なかなか洞穴に入れずにいた。

『こんな時、茂助様ならどうするんだろうなあ…。』

きつと、馬鹿みたいに明るくしてくれるんだろうな。』

権左は、そんな事を考えていると、少し気が晴れた。そうして洞穴に向かって行つた。

『行つてきたぞ…。』

『おお！権左、無事に戻つたんだな。』

やはり、茂助様は…』

駆け寄つてきた村人達に、権左はただ頷ずいた。

『行つてしまわれたか。』わかつていた事で、覚悟も出来ていたつもりだった。だが、突き付けられた現実に、体が反応して涙が溢れてしまう。

理解をしているのか子供達の中には、

『茂助のおじちゃんは何？』

と、母親の袖を引っ張る子もいた。母親は、そう言う子供を抱き締め泣いている。

『ハハハハハハハ！！』

いきなり、泣き顔の権左から笑い声が響いた。

『この馬鹿！！何がおかしんだ！！気でも狂ったか！！』

父親の権平が、権左の頭を叩いた。

『いままで、茂助様に何を教わってきたんだ！辛い時ほど笑えって言つてたじゃないか！』

茂助様はな、敵に連れていかれながらも、いつものように俺に笑いかけてくれたんだぞ！』

権左は、泣きながら訴えた。

『そうだなあ……。いつまでも泣いてばかりじゃ、茂助様に怒られちまうな……。』一人の村人が、ボソツと呟いた。

『見てみる！みんな！茂助様は、帰ってきたぞ。』

権左は、懐に入れておいた銭の入った巾着を取出した。

『茂助様は、俺たちを助ける為に……。形は変わっちまったけど……。』

これで、立派な村を作るうや！あの世から茂助様が見てビックリするような！』

『馬鹿野郎！！縁起でもねえ！茂助様は、まだ死んでもねえだろうが！！』

またもや、権平の拳が飛んだ。

『まったく！オレらに説教しやがって！』

いつからそんなに偉くなつたんだ！』

『お前に言われなくなつて、村くらい作つてやるさ！茂助様の為だ！』

村人達も、権左に必死に言い返していた。

涙はすっかり止んでいた。

弱虫だった権左に、勇気づけられた村人達は、泣いてばかりいた自分達が急に恥ずかしくなった。

また村人達は、そうした中で、これまでの誰かに頼る生き方だけで

は駄目だと気付かされた。

権左が見せたような、強さを身に付けようと考え始めたのだった。

次の日の洞穴に、村人達の姿は残されていなかった。

村人達は、自らの村が焼けるのは見ていたが、躊躇する事無く自分達の村に戻っていったのだった。

拾九の巻『茂助の生き様』

茂助はその頃、村人達の姿を、遠くから見守っていたのかもしれない。

捕らえられた夜に、茂助は敵の大将、木之下秀家の前に連れられた。

『おい黒雲。この者は水野に間違いないか？』

秀家の横には、海東に仕えていた忍びの黒雲が控えていた。

黒雲は、海東に仕えていた忍びの頭である。

海東家の家老水野から、焼け落ちる城の中で託された、海東家の若殿である珠々丸一行を裏切ったのだった。黒雲は、従う忍びと共に珠々丸一行に襲いかかり、女子供、容赦なく殺害した。その中には、亡き主君の奥方の風の方も含まれていた。そうして黒雲は、珠々丸を木之下勢に引き連れたのだった。

『いや…。この者は、荷駄頭の菅沼茂助という男。』

水野様は、城中にて腹を召されました。』

『どういう事だ！柴田あ！』

秀家の厳しい目が柴田に向けられる。

『いや…。その、これは…。貴様！騙しおつたな！』

体を丸くしていた柴田が、刀を抜き刃を茂助に向けてきた。

茂助は、動じる事無く目を瞑った。

『待て柴田！！』

秀家の声が柴田の動きを止めた。

『菅沼と言ったの。そなた、なぜに水野に化けたのだ？』

『民の為にございます。先日、この辺りの村を焼かれましてなあ。村を作り直す為には、金が必要になる。』

しかし、ワシは組頭とは言えども、米炊きが専門。大した金は頂けませんまい。

だから、水野様の名を使わせて頂きました。』

『民の為だと？ハハハ！』

百姓に捕らえられた負け惜しみか？』

『いやいや、ワシが自ら提案した策でして…。』

この老いぼれには、これが精一杯で御座います。うまくいってよかった。』

茂助は笑いながら言った。柴田は、恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

『誠に民の為、自らを犠牲にしたのか？』

秀家は、茂助の言うことは理解できなかった。

自分は何をしても勝つ事ばかりを考えていた。しかしこの男は他人の為に、自分を犠牲にするという。

秀家は、そんな事考えたこともなかった。

生まれた時から殿であった秀家には仕方がない事だ。

それよりも、茂助のように死んでも守りたい物を自分は持っていないように感じた。

『村を焼き払うような殿様には、私を理解出来んでしょうな…。』

『なんだと？』

秀家の顔色が変わった。

周りの者は『こいつは、何ということをつのか…』と思い、静まり返った。

『殿様も、米を食べるでしょう！』

その米は誰が作りますか？民は、国の宝なのですぞ！』

茂助の最後の抵抗だった。

『だつ黙れ！貴様のような者に何が分かる！』

『下っ端だからこそ、解る事もありますぞ。そのような怖い顔をしていては、幸が逃げますぞ。』

この陣も、つまらんですな！みな貴方様を警戒して、笑顔一つ見せん。ハハハハ！つと笑えばよかるう！』

茂助の目は秀家を睨み付けていた。

『黙れ！！！！』

ズバッ！！！！

秀家は、立ち上がり感情の赴くまま、茂助を切り捨てていた。

自分の生き方を否定されたような、生まれて初めての気持ちだった。自分の内面を見透かされているようで、この茂助が急に恐ろしくなってしまうたのである。

『はああ、はああ……』

『と、殿……』

いつもは、冷静な秀家が、このような老人に取り乱すとはと、馬廻りの者は秀家の姿に戸惑いを隠せなかった。

『この者を、丁重に葬むってやれ……』

冷静に戻ったのか、秀家は周りの者に言い付けた。

茂助の亡骸を、周りの者が引きずり去っていった。

一人残された秀家は、目を閉じ、考え込むように動かず、ただ時間が過ぎていった。

菅沼茂助直隆。六十二歳の最期であった。

亡骸は、木之下の陣近くに埋められた。

それから数日後、国に流れる、多田川で珠々丸の処刑があると聞き付けた村人達は、茂助の姿はないか大挙して押し掛けた。もちろん、茂助の姿は無かった。

『きつと生きてる！』

『いつか帰ってくるぞ！』と村人達は自らを鼓舞し、必死になって働いた。

茂助の残した金のおかげもあって村は少しずつ、元の姿に戻っていた。

さらに一年が経った頃、村人達は、茂助を供養する為に地藏を作ったのだった。村を守るように、村の玄関口とも言える、橋の傍に。そして、その目線の先には茂助と別れた山を見つめるようにした。

茂助の帰りを待つ村人達の願いを込めて。

なにより、茂助を忘れぬように。

それから村人達は、茂助がよく言っていた言葉を教訓とした。

『人に優しくすれば、自分にも帰ってくる。』

笑顔も同じだ。笑顔でいれば自分にも帰ってくる。侍達は、わしを馬鹿だと笑うがそれでよい、皆が笑顔でいればそれでよい。』

そんな考えが自然に、この辺りに根付いていった。

茂助は亡くなったが、形を変えて、村人達の中でずっと生き続けたのだった。

貳拾の巻『旅の終わり』

こんな話を聞きながら、孫一は老婆の家で、何日も過ごしていた。孫一が体験した、この辺りの人達のやさしさの訳を垣間見れた気がした。

孫一は、その間老婆を助けるように働いた。

『何日もすまなかった、よい話を聞くことが出来た礼を言う。そろそろ、行かねば。』

孫一が、老婆に言った。

『かしこまらなくて、よいぞ、また来なされ……。』
老婆は、少し寂しそうだった。

『そうだ。その前に、この辺りに寺はないか？』

孫一が老婆に尋ねた。

『寺？寺ならば、すぐそこにあるぞ。』

孫一は、老婆が指を差す方に走っていった。

確かに、古びた山寺があった。

『誰かあ！誰かおらんか？』

『なんじゃ？』

ゆつくりと白髪の僧が出てきた。

『おお、剃刀をお借りしたいのだ。』

『出家でもしたいのか？お侍？』

『違う違う！ええから、早く。』

『承知しましたよ。お待ちください。』

『はい。これをどうぞ』

しばらくすると、僧は剃刀と桶に水を入れ持ってきた。

『おおつ、ありがたい！』孫一は、伸びきった髭を剃り落とし、髪を整えた。

『どうじゃ、男前になったか？』

孫一は、僧に得意げに言った。

『はは、お侍。ええ人相をしとる！初めは熊が来たかと思ったぞ！ははは』

神仏のご加護がありますように……。』

僧は、孫一の事を拝んでいた。

『では、これをお返しします。感謝いたします』

孫一は、僧に剃刀を手渡し、一礼すると

老婆の元に引き返していった。

『おゝい！婆さま！見とくれ！』

孫一は、老婆に変わった姿を見せた。

『おお、ええ男になったなあ……。その方がええ。その方がええ』

孫一を見た老婆は、優しい表情で頷いていた。

『婆さまの話で、心が決まった。』

わしも、国に帰り、茂助様のように皆に、感謝される者になるぞ！』

『大丈夫じゃ。あんたなら、ええ侍にな

る。』

『婆さま、元気出な。』

また、必ず会いにくるからな。』
孫一も名残惜しそうだった。

『頑張りなされ！』

ほれ、早く行かんと、せつかく剃った髭が伸びてしまっぞ！』

『ははは！では、これにて。』

孫一は、笑顔で老婆と別れた。

『実に、いい天気だ…。』いつものように、熱い夏の日だが、なんだか心地よかった。

孫一は、茂助の地蔵に向かった。

前に団子を取ろうとした、あの地蔵である。

『茂助様、この前は申し訳ありませんでした…。』

孫一は、地蔵に向かって話した。

前に見た時よりも、地蔵の表情が和らいで見えた。

『あなたの望んだように、立派な村になっておりますぞ。

私もまた、あなたとの出会いで変えられました。

礼を言います…。』

孫一は、頭を下げると今まで歩いてきた道を戻っていった。

この国で出会った、茶屋の親子や、居酒屋の主人と話を交わし、足早に自らの国へと急いだ。

何日も歩き、何とか一月後、故郷に辿り着いた。

山や川、景色は何も変わっていない。子供の頃のままだった。

だが、孫一の生まれ育った屋敷は、人の住んでいた名残も無いほどに荒れ果てていた。

逃げるように、家を飛び出してから約二十年。

とは言え、あまりの荒れようを目の当たりにして、孫一は言葉を失った。

そんな時、孫一の後ろを農夫が、通り過ぎていった。

『すまんが、ここに三条家の屋敷があつたはずなのだが？』

孫一は声を掛けた。

『あんた何者だい？』

確かに、ここは三条家の屋敷があつたよ。

だがな、戦で主人を亡くしてな。あとはひどいものだ。

屋敷の宝を狙った、野武士だか野党だかに、襲われて皆、死んじまつたよ。』

『父も兄上もか！？誠に皆死んだのか？』

孫一は、農夫に食って掛かった。

『なんだい、そんなの知らねえよ！離してくれ！』農夫は、孫一を振り解き、逃げるように走り去ってしまった。

『そ…そんな。』

孫一はその場に、へたり込んでしまった。

しかし孫一には、すべてを受け入れるしかなかった。二十年という時間の隔たりは、あまりにも大きなものであった。

孫一は、荒れた屋敷を眺めながら、昔の記憶を思い出そうとしていた。

『貴方は、もしかして孫一か？孫一じゃなのか？』

誰かが、孫一に声を掛けて来た。

孫一が、顔を上げると男がこちらを向いて立っていた。

『やっぱりそうだ！俺だよ！佐吉だよ！忘れちゃったのか？』

『佐吉…。あつ！！』

鈴ヶ森のガキ大将の佐吉か！？』

『そうだよ！その佐吉だよ！変な侍がいるって聞いてよ、まさかと思つて来てみたんだ。』

よく帰ってきたなあ、心配してたんだぞ！』

佐吉とは、孫一の幼なじみである。

武士と百姓、身分は違つたが、家では孤独な少年時代だった孫一の心を埋めてくれた、親友の一人だった。

二十年ぶりの再会も、孫一の笑顔は続かなかつた。

『この変わり様はなんだ。まるで、狸に化かされてるようだ。』

孫一が、佐吉に投げ掛けた。

『そうだろうな。この辺りも沢山の人が死んだ。』

特に、お前の家は酷いものだった…。』

『そうだったか。もう誰も生きてないか…。疎まれた俺が生き残るとは、どんな因果だろうな。』

『墓には、まだ行ってないだろう？案内してやる。』佐吉に、三條家が眠る寺に案内された。

『この墓に、父や兄たちが眠つとるのか…。』

『ああ…。』

『申し訳ありません…。孫一、ただ今戻りました。』

孫一は墓の前に、手を合わせ伏して詫びた。

『必ずやこの孫一、恥ずかしくない男になります…。』

孫一の気持ちは決まっていた。

孫一は、佐吉の力を借りながら、朽ちた屋敷を少しずつ直していった。

孫一は、寺子屋と道場を創設した。

名前を『茂修館』（もしゅうかん）茂助の考えを修める。と言った意味である。

茂助によつて自分を変えてもらった孫一の感謝の気持ちも含ませた名前だった。

数年後、この『茂修館』には、子供達や若者が多く入り活気に溢れた。

規模も最初に比べて大きくなった。

まさに、孫一の優しい人柄の賜物だろう。

新人生が入った時には、必ず『米炊きの茂助』の話をする孫一の姿があった。

『よいか皆、ここ茂修館は茂助様という、立派な人物になるようにと、この名前を付けた。』

今日は、その茂助様の話をするぞ。』

『その昔な、とある国で茂助という侍がいたのだ…。』

子供達は、食い入るように孫一の話聞いている。

遠く離れた、この土地にも茂助の考えが、根付くことになるだろう。

そんな光景を見守るように、茂助のように暖かく、柔らかな陽の光が学舎を包んでいた…。

人は、人との出会いで変わっていく。

たとえそれが、死んだ人間との出会いであっても、その人の生き様が人を変え、導びいてくれる。

完。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0472b/>

米炊き、茂助。

2010年10月10日01時51分発行